

# 天パー侍と絶刀の少女

悪維持

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様と名乗る女性から、異世界へと飛ばされる事になった銀時。其処では悪魔、天使、墮天使等の人外が存在し、其処で人外達を狩る美少女達に出くわすは、錬金術師に協力するは、はたまた教師になるわで元の世界とは違うものの銀時は振り回される事になる。果たして銀時は別世界でも上手くやって行けるのだろうか？

# 目次

プロローグ	1
異世界から来た白夜叉編	
第壱話 異世界到来	16
第弐話 最初の出会い	25
第参話 チフォージュ・シャトー	35
第肆話 侍と錬金術師の邂逅	44
第肆之伍話 錬金術師と雷光の巫女	58
第伍話 白き夜叉と天翔る剣士①	61
第陸話 白き夜叉と天翔る剣士②	70
第漆話 白き夜叉と天翔る剣士③	81
第捌話 終末の四騎士・蒼き聖杯	85
第玖話 終末の四騎士・山吹の硬貨	95
第拾話 終末の四騎士・翠緑の剣	103
第拾壱話 終末の四騎士・紅き杖	112
第拾弐話 少女との邂逅	122
第拾参話 同棲生活	129
第拾弐之伍話 解き放たれし絶刀は白夜叉と共に……①	136
第拾弐之伍話 解き放たれし絶刀は白夜叉と共に……②	145
第拾肆話 巡り会う主役	155
第拾伍話 新任教師	164
第拾陸話 ヤギとか〇はめ波	170
第拾漆話 黒き龍の魔帝	183

## プロローグ プロローグ

そこはこの世にあつてこの世にあらず、転生の空間と呼ばれし亜空間。そこでは、死した人間が転生し異世界で第2の人生を決める場所である。そして、また一人この空間で眠っている男がいた。

「……………んあ？何処だ……………ここは……………う？」

この銀髪天然パーマの男は坂田銀時。『銀魂』の主人公で江戸のかぶき町で何でも屋「万事屋銀ちゃん」のオーナーを勤めており、伝説の攘夷志士の異名「白夜叉」と敵味方に恐れられた侍である。

現在の銀時の衣装はいつもの服装「漫画&アニメ版」で、腰には辺境の星で育った樹齢一万年以上の木から作られ、柄の部分に洞爺湖と彫られた木刀……………妖刀・星砕きを腰に装備していた。

銀時は辺りを見渡すが……………どこもかしこも暗闇で覆われて何も見えず、しかも誰一人居なかった。

「このパターンって……………また『洞爺湖仙人』じゃねえだろうな？いや、あのアホがやるなら新八と神楽もいる筈……………って、それならアイツら何処だ？」

いつも一緒にいる眼鏡と大食いチャイナ娘……………

『何で僕だけ眼鏡なんだよ！お前は僕を何だと思つてんだああ!!?』

……………が居ないのを察すると、時々下らない必殺技習得の為に自分達を呼び出す仙人の仕業では無いと悟つた銀時。どうしたモノかと頭を掻き始めた。

「つたく、何だっただよここは……」

「ここが何処だか知りたい？」

「ツ！いつの間……」そんなに警戒しなくても大丈夫、何もしないから♪」……へっ？」

突如声が聞こえ、後ろを振り向くとそこには一人の女性が笑顔で微笑んでいた。

女性は二十代前半で赤髪のロングヘアに蒼い瞳、桃色の着物ドレスに翠色のコートを羽織っていた。女性は笑顔を絶やさず、銀時との距離を対等にする。

「いやあく マジかで見ると良い男にみえるねえ？ そう思うでしょ？”白夜叉”さん♪」

「……お前、何処でそんなモンを……」

「誰だっただ知ってるよ。ワ・タ・シ、神様ですから♪」

「はあ……神様だあ？ おいおい、お嬢さんよお、神様なんてもん本当にいると……」宇治銀時井あるけど食べる？」……信じます神様！」

女性は銀時が白夜叉である事を知っていた。だが、銀時が白夜叉である事を知っているのは万事屋で働く二人と、悪友にチンピラ警察の三人+α だけである。

明らかに怪しい女性はあろうことか神様と名乗る始末……銀時は呆れて信じようとしなかったが、女性は何処からか銀時の好物の宇治銀時井（ご飯に小豆をぶっかけたモノ）を取り出してみると銀時はあっさりとした……この男、甘いモノには弱い男である。

「信じてくれてありがとう。さてと、まずは自己紹介ね。アタシは兵鬼ひょうきかおる 薫。とある人から頼まれて銀さんの担当になりました。以後お見知りおきとよろしくね♪」

「あつそう、んじゃ改めて俺は坂田 銀時「侍でしょ?」:ちよつと?人のセリフ取らないでくんない?」

「あははは♪ゴメンゴメン……ついね、さてとここは転生の間、死んだ人間が新たな生命を得て第2の人生を満喫する所を決める場所なのです♪」

「ふうくん………おい、ちよつと待て……死んだ人間………つて事は………俺、死んでんの?」

「うん、そだよ」

銀時は薫から死と言う言葉に冷や汗をかく。冗談だと思いう銀時だが、薫はキツパリとカミングアウトした。悪びれもなく………

「う、嘘おおお!!ちよつとおおお嘘だと言つて!!銀さんいつの間に死んだの!?!何時、何処で、何の要因でえええええ!!?」

「落ち着きなよ、こつちの手違いで銀さんはここに来ちやつたんだよ。つまりは誤認転生つて奴よ」

「は?誤認転生……?」

突然、死亡宣言された銀時はパニックるが薫が誤認転生と言った際に銀時は首を傾げた。だが薫はまだわからない銀時に分かりやすく説明を始めた。

「まあ……間違つて、まだ生きている人間を此処に連れて来ちやつたケースを誤認転生つて言つてね……」

「んじや、俺はその手違いとやらで此処に連れて来られたつて事か？」

「そ、それに……あちらさんの責任なのに、お偉いさん等はアタシに銀さんの担当を押しつけたつて訳……はあ、まったく酷いと思わない？」

『本当に迷惑よねえ？』と言う風にため息を吐く薫に、誤認転生に呆れるしか無い銀時。そんな時、薫が真剣な顔で銀時を見つめる。

「それでなんだけど……銀さん、異世界に行つてみない？」

「異世界だあ？人を勝手に死なせて、こんな所に連れて来られた挙げ句に何で知らねえ世界に行かなきゃなんねえんだよ」

「まあまあ、そう言わず……銀さんのいる世界はとても面白いよ？でも、他の異世界に行つてみれば気分転換になるんじゃない？」

「いや、人の話聞けよ！何、修学旅行のしおりに書いてる注意事項みたいな事言つてんの!？」

「悪いけど、銀さんに拒否権無いから♪……ポチツとな」

めっちゃ嫌がる銀時を無視して薫はコートのポケットからスイッチがあるモノを取り出してスイッチを押す。すると上からマジックハンドが出て来て銀時を捕まえた。

「ちよっ!?!何?何コレ!?!ま、まさか……」

そして空に目掛けて……銀時を勢いよく投げ飛ばした。

「ギャアアアアア!!」

「アタシもちよくちよく遊びに行くからねえ♪」

「てめええええええええええええええ!! 後で覚えとけ  
よおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
!!!」

真つ暗の空間で断末魔を叫びながら一番星になった銀時を見送った薫は気にせず背伸びをした。すると空間が歪み、そこから灰色髪のロングヘアーに赤い瞳、翠のワンピースを着て白のブーツを履き、首には黒のマフラーを巻いた女性が薫と同じ笑顔で手を振って来た。

「ヤツハロ〜♪お勤めご苦労さ〜ん」

「あつ、”ヴラド”さんー!」

女性ーヴラドがやって来たのに気づいた薫は、まるで姉がやって来た様な素振りで彼女の両手を握った。

「ゴメンね〜薫ちゃん……仕事押しつけちゃって」

「大丈夫だよ、ヴラドさんの頼みだもん。アタシはそれに応えるのが仕事だからさ♪そ・れ・に、退屈もしなくて済むし……」

薫は口にコートの袖をつけて含み笑いをして銀時が飛んで行った方向を眺めていた。ヴラドは笑いながら薫の頭を優しく撫でる。

「それは良〜ございましたなあ〜♪でもホドホドにね?」



「はあ〜い♪……ところで”陽”は？」

「ああ〜それなら……おつ、噂をすればナンとやらか」

ヴラドが後ろを振り返ると、自分が来た歪みから龍を模した黒く錆びた鎧の怪人と、水色の蛇を模した巨大な鎌を肩に担いだ少年が現れた。

少年は白髪に左目が隠れるまで伸ばしたセミロングで紅い瞳、衣装は白いワイシャツと黒いズボン、中学生が使う黒い上着を羽織っていた。

「どうした？それでよく最強と言えたな…」偽龍帝？」

「その名前で呼ぶな！俺は赤龍帝だ!!」

鎧の怪人は少年に向かって殴りかかるが、少年はそれを軽く避け、巨大鎌を怪人の胸に斬りつけた後、鳩尾に蹴りを入れる。

「ガハッ!？」

怪人は二、三回バウンドをしながら地面に這いつくばる。少年は鎌を担ぎ上げ、怪人に話しかけた。

「さて……君の罪科だけど、自分が主役の場を創る為に同じ神器所有者である兄を化け物と仕立てあげて迫害し、悪魔に転生した後でリアス・グレモリーと姫島朱乃、紫藤イリナを自分に惚れさせる事が出来た……どうせ狙いはハーレムだろ？」

「そのの何が悪い……アイツさえ……あの出来損ないさえいなくなればオリ主である俺が！この兵藤宗二こそがハーレムを作り上げて、世

界の英雄になる筈だったんだ!!それをアイツは……龍見一誠とその仲間が俺の何もかも奪いやがった!!夢も野望も何もかも!!」

鎧の怪人―宗二は満身創痍に立ち上がり黒いオーラを放ちながら自分の黒い野望を言い放つ。少年は静かに聞いていたが……

「ククク……アハハハ!ハハハハハ!!」

少年は笑った、黒い笑顔で宗二の野望を喜劇だと思つたかの様に……

「何が可笑しい!!」

「いやあ……これまで見てきた愚者は下らない理由で異世界に迷惑をかけてきたけど……君は本当に、非常に下らない夢を持つてるんだな………つてね?」

「てめえええええええ!!」

宗二が少年に向かって再び殴りかかるが、少年は紙一重で避けると同時に距離を離す。

「君が見誤つた部分は……彼を甘く見すぎた事だ……例え弱い力でも少しづつではあるが強く、成長する。強くなりたい……強くなつて誰かを守りたい……その力を何かの為に役立てたい………その考えが彼にあつて、君には無かつたんだよ。そんな中二病な考えだからいつまでも君は舞台の脇役……格下と言われ、永遠に主役にはなれない。それぐらいわからないのかな?……中二病偽龍帝様?」

「黙　れ!　　黙　れ!　　黙　れ!!　　ダ　マ  
レエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」



「グアアアアッ!?よ、よくも……よくも俺の顔を!!」

「良かったじゃないか、傷物系は流行るって噂だよ?……知らなかったのかい!」

「アベシツ!」

鬼崎はその後、宗二のむき出しの顔に目掛けて死鎌の柄を叩き込む。宗二の顔は鼻血を垂れ流して歯は1、2本抜け出ていた。

「まだまだ!」アベス・クロスラッシュ【冥十字斬】!!」

鬼崎は死鎌に紫のオーラを纏わせて宗二の鎧をバツ型に切り裂く。すると鎧はガラスの様にヒビができ、容易く砕け散った。

「なっ!」

「はあっ!」

「ガッ!」

鎧が砕けた事に驚きを隠せない宗二に、鬼崎はもう一度死鎌の柄を宗二の腹部目掛けて叩きつける。すると宗二は後退りながら腹を抑えて両膝をつけると……………

「オボエエエエエエツ??!!」

口から汚物と一緒に血を嘔吐した。宗二は小刻みに顔を向け、鬼崎を睨み付けようとするが……当の本人は害虫を見る目で宗二を見下しながら狂い笑う。



右腕から血を吹き出した後に激痛が走り、宗二は右腕があつた部分を抑えながら口から涎よだれを垂れ流し、のたうち回る。

「う、うで……おれのうでが………」

「見苦しいんだよ、愚者の分際で命乞い？笑わせないでよ………」

「ひっ!?く、くるな……くるな!くるな!こないでくれえ!!」

宗二は切断された右腕を抑え、だらしない声をあげながら必死に鬼崎から逃げる。鬼崎は戦意喪失した宗二に呆れ、ため息をついた。

「はあ……でもまあ、そろそろ終幕フィナーレに移っても文句ないだろ」

鬼崎は宗二が逃げる方向を目を細めながら見つめる。鬼崎は死鎌の刃を左手で握って切り傷を作り、自分の血を刃に塗らせる。すると赤く染まった刃に水色のオーラが集まり、刃にまとわりつく。

「……食らえ!」

鬼崎はオーラを纏った死鎌を振るうと、ピラミッドを模したエネルギーギースが放たれ、宗二に勢いよく迫って行く。

「ヒイヒイッ!」

ぶつかると!そう思い、宗二は目を瞑るが……いつまでも来ないので目を見開くとピラミッドは消えており、接触した筈なのに痛みも無かった。



「いい絶望の顔と断末魔の音色だったな……」

「お疲れ様、陽♪」

「やあ、薫<sup>ねえ</sup>、義姉さん<sup>ねえ</sup>”。仕事は終わった？」

「もちろん、すぐに終わったから問題無いよ♪それにしてもあの子の顔……愚者にふさわしい絶望の顔だっだねえ〜 クフフ……!」

鑑賞に浸っていた鬼崎は、こちらに歩み寄る義理の姉、薫に気づいた。仕事の方は大丈夫かと聞いたが、薫は問題は無いと言い、宗二の絶望を楽しんでいた。すると薫の後にヴラドがやって来るのに気づいた鬼崎はその場で跪く。

「スカーレット様……この鬼崎 陽太郎、遅ればせながら馳せ参じました……」

「いやあ〜♪陽君、見てたよ君の戦いっぷり……まうた強くなったみたいだねえ〜?」

「いえ、私<sup>わたくし</sup>など、まだスカーレット様に及ばない程でございます……」

「アハハハ♪もうう、謙遜しちやってえ……やっぱマジメだね、陽君は♪」

礼儀正しい態度を取る鬼崎に、ヴラドは褒めながら肩を優しく叩く。

「それはそうと、どう? 私が連れてきた偽龍帝<sup>クハス</sup>の歯ごたえは?」



「全然ですね、あれで最強とは底が知れますよ。所で義姉さん、あの人……確か、銀時さんと言う人の担当になったけどちゃんと出来るの？」

「妙なところにカマかけるね……大丈夫よ、アタシを誰だと思ってんの？アンタの姉ちゃんなんだからさ」

「ふっ、そうだね。心配しすぎたみたいだ……もしかすると適当にやるんじゃないかなあ〜と思ったけど……大丈夫そうだね？」

「……それ、どう言う意味よ？」

「……さあ、別に？」

鬼崎の発言にピクピクと眉を引くつかせる薫の顔を見て、急にゾクツと感じたヴラドは、喧嘩に発展する前に二人を宥めながら頭を撫でる。

「はいはい、姉弟口論はそこまでにして……あつ！そうそう、陽君と薫ちゃんに渡したいモノがあるから家に来ない？それでいいでしょ？ねえ♪」

「御意に」

「はあ〜い♪」

その言葉を皮切りに、三人は空間の歪みに消えていった。

その頃、薫によって異世界に飛ばされる事になった銀時は……



## 異世界から来た白夜叉編 第壹話 異世界到来

それは……数年前か、数千年前の事かも知れない昔の事……

この世界では悪魔、天使、墮天使と呼ばれる人ならざる者達の三大勢力が世界の覇権を巡り、争いが勃発した。

だが、争いが続くにつれ……彼等は龍の中でも最強と謳われた二天龍である赤龍ウエルシユ・ドラゴンと白龍パニシング・ドラゴン帝と白龍皇に遭遇、二天龍は三大勢力と人間界に壮大な被害を及ぼした。だが、三大勢力はこれ以上の争いは無駄だと感じ一時共闘を決意、二天龍を神器セイクリッド・ギアに封印する事に成功したが……その代償に悪魔側の指導者である四魔王と世界の神が亡くなった事で長く続いた戦いは終わりを迎えた……

戦争後、神器に封印された二天龍の行方は三大勢力の搜索も虚しく、継続不可能と考え、搜索に手を引いたが……悪魔側の少数が探しているという噂だとか……

そして長い時が流れて……現在……

ここは駒王町くわうちょう、一見普通の町ではあるが……本来は悪魔が管理する領土で、グレモリー家次期当主のリアス・グレモリーが兄にして新四魔王の一人、サーゼクス・ルシファーから与えられた領土でもある。だが……この町では、はぐれ悪魔《主人を殺害した契約悪魔の成れの果て》が逃げ延びており、時として人間を襲っていた。だが……この町には悪魔でもはぐれでも無い存在が潜んでいるとは……三大勢力もはぐれ達も知るよしもなかった……

ここは駒王町のとある一角にある公園……日が隠れて夜になり、三日月が輝いている時間帯では一組のカップルが夜空を眺めていた。

「あつ！見て、あそこに流れ星が」

「え？何処何処？」

「あつ、消えちゃったか……」

「うつそく 見たかったのになあ」

「いるじゃないか、僕と言う流れ星……」

「あつ！一番星!!」

「ちよっ!?!俺の話聞ってる!?!」

「ほらっ！あの星、一番光ってるよ」

「本当だ……はっ、ゴホンッ！でも一番輝いてるのは僕と君の愛さ……」

「ああ、はいはい」

「……泣いていい?」

「どうぞ」

「うわああああん！お星さまなんて嫌いだバツキヤ

「オオオオオオオオ!!!」

なんて平和な風景でアホなやり取りであろうか……すると  
……

『……ああああ』

「あれ？ねえ、何か聞こえない？」

「グズツ……何って、何が？」

「ほらっ、耳をすませば聞こえるでしょ？」

「ん？」

女性がそう言うと、泣きべそをかいてた彼氏の男性も耳をすませ  
てみる。

『ああああ……!』

「確かに聞こえる……でも、何処から？」

「あつ、何あれ？」

「え？」

女性が夜空で何かを見つけ、指先を向ける。男性は彼女の指先に向  
けたところに目を向けると……

「ギヤアアアアアアアアアアアア!!!」



一方、空から降ってきた銀髪の男……もとい銀時はと言うと……

「い、痛つてく！な、何だつてんだよ……」

意外と無事であった。原作の『紅桜編』や『真選組動乱編』、『吉原炎上編』に『紅蜘蛛編』、『四天王編』でも普通なら死んでも可笑しくなくらいの大怪我を負っているが……どうやら悪運が強いのか、何と言うか……

「いや、何と言うかじゃねえよ。何度、原作で死にかけたと思つてんの？この作品で俺殺す気なの？ねえ？」

あの、銀さん……地の文読むの止めてくれませんか？一応僕、この作品の作者なんですけど……ゴッホン！話を戻しますよ？

「おい、こっちは無視かい傷だらけの主役は……それにしてもここが異世界か？」

そう言いつつ、銀時はフラフラと起き上がり、周りを見回す。町並みは自分達の町と似ているが、古風な建物が無く周りの人間が着ている服装が異なっているのを推測し、異世界だとわかった。

「マジで異世界に来ちまったのかよ……あの女の言つてたのはデマかせじやねえつて事か……」

銀時は自分を異世界に送った張本人……薫の言葉が嘘では無く真実だと知ると、頭を搔きながらため息をついた。

「はあ……こうなったら、しゃあねえ……とりあえずこの世界に馴染むためにも名物とかそういうモンでも見て回るか…」

向こうで死んだと宣告され、かぶき町に戻る手段も無いと悟った銀時はまずこの世界の事を知るために公園を出て、街へと向かった。数分街を見て回ると、自分の世界とは違うモノが多々あった。電化製品や食べ物の種類、そしてテレビなどで放映されている番組等々……自分の世界にあつて無い物があると知るには十分ある。

これを知り合いの機械技術士や、宇宙で大きな商いをしている旧友にでも見せたら泣いて、驚いて、喜ぶだろうなと思いつつながら街を観光気分で見続けていると、突如雨が降りだした。

「げっ！マジかよ、傘持つてないんだけど!？」

急いで雨宿りできる場所を探していると、町外れの廃ビルに行き着いた。

「ふいふ 近くに良い所があつて良かったぜ……しばらくはここで雨が止むのを待……」ギャアアアアアアアア!! …… ……ッ?!?!」

そう安心してしていると叫び声がビル全体に響き渡る。銀時はドキッと震え上がり、大量の汗を流していた。

原作を知っている皆さんはご存知だろうが、銀時はホラー系が大の苦手であるため、こう言う廃墟＋不気味＋悲鳴が揃っている雰囲気だけで恐怖スイッチが入ってしまうのだ。

「は、ははは……き、気のせい……気のせいだよな? あっ! そうだ、こんな時はドラ○もんの歌だ!! そうだ歌えば怖くないぞ!?! うん!!!」

銀時も突然の悲鳴に即刻パニックリ、有名猫型ロボットのテーマソングを歌い出した。





がMAXとなり銀時は廃ビルの上の階へ絶叫しながら疾駆した。

すると、向こうの影から一人の少女が爆笑しながら現れる。

「キャハハハ!!マジでうけるんですけどアレ!ちよつと声かけたらビビって、その後絶叫しながらダッシュユって……ガリイちゃんお腹痛あゝい!!キャハハハハハ!!ヒイヒイ……笑い死ぬうゝ!クヒヒ……」

黒髪のセミロングに青を基調としたゴスロリチックな衣装を纏った少女ーガリイは、先程銀時に声をかけた人物であるが……どうにも性根が腐っているのか、銀時のビビる反応を面白がっていた様で、今でも笑い転げている。

『ガリイ、おいガリイ!聞いているのか!?』

「はあ……はあ………ハイハイ、こちらガリイですうゝ」

ガリイは笑いを抑えながら、誰かと連絡を取り始めた。

『目的地には着いた様だな?……と言うか一体何を見て大爆笑してたんだ?』

「ああ、お気になさらずに”マスター”。ちやあんと遂行させて見せますからあゝ」

『そうか……今、其処にグレモリーの小娘とその眷属が向かっている………直ぐに終わらせて戻って来い。良いな?』

「りようかーい!ガリイ、がんばりまくす☆……ああ、かつたる………サク、サクツと終わらせますか」

マスターと言う人物との連絡を終えるとガリイはやるせない態度をとった後、バレリーナのようにクルクル回り始めた。すると内部全体に水蒸気が発生したのを確認し、床を滑るかの様に上の階へと向かった。そこに残っていたのは、まるでスケート靴で走ったかのように凍った跡だけであった。

――――  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

キャロル・マールス・デインハイム：水瀬いのり  
ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

叫び声：水原薫

男性：古川慎

女性：赤崎千夏

## 第貳話 最初の出会い

恐怖ゲージを振り切り、全速力で疾駆した銀時はいつの間にかビルの最上階にまで登り詰めていた。

「ハア……ハア……ここまでくれば大丈夫だろお………てゆるか、アレびつくりしたただけだし？お化………違う！スタンドなんて存在しないもん！そうだ、あの時はたまたま雨の雫石が首にかかったただけだ!!そうに違いない!!」

スタンド（通称：お化け）はいない！と自分に言い聞かせる銀時だが………未だに汗が流れ、身体も震えている。

本当はまだ怖い癖に………

「よくし！落ち着け？落ち着けよ俺………ツ!？」

自らを落ち着かせようとしていた銀時は何か異様な気配を感じ、抜刀の構えで木刀を握りながら辺りを警戒する。

攘夷戦争時代、『白夜叉』の異名で敵味方に恐れられた事もあるが奇襲や隠密行動、敵の情報収集など裏方の隊長をしていた経歴があり………気配や殺気等に対する感受さにおいては一級品である。

だが、銀時でもこの異様な気配は初めてで………若干だが冷や汗をかいていた。

（何だ？この異様な気配………何か潜んでやがるのは間違いないねえ………だが、敵意でも殺気でもねえ………この気色悪い気配は何だ？）

謎の気配に息をのみ、集中力を研ぎ澄ませる………こういう嫌な勘だけが、一番当たる事が多いのが銀時の良いところなのか悪いところなのか分からない気がするが………

すると、突然後ろから青い斬撃が襲ってきた。

「ちっ……やっぱりかよ!!」

銀時は自らの予感的中した事を恨み、軽く舌打ちをした後、木刀を引き抜いて斬撃を叩き切り霧散させる。すると斬撃が飛んで来た方向には……………

「ッ!？」

妙なコスプレをし、巨大な剣を持った少女がその場に居た。

少女は青髪のサイドテールに青い瞳、服装は黒と青を基調としたボディースーツを着用し、足には刃の様なモノを、耳にはヘッドホンの様なモノが装着されていた。そして、特徴的なのは胸に紅黒い結晶の様なペンダントがある事だ。

流石の銀時も、まさか女が相手だとは思ってもいなかった……しかも露出度高めの奴を着ていれば誰でも動揺する。だが、少女の様子が異様なを感じる……それは生気がまったく感じられず、まるで人形のように自我を支配されている感じだった。

「……………」

少女は無言で持っていた剣を鋭利な刀に変形させ、銀時に向かって突きを繰り出す。だが、銀時は紙一重でかわし木刀を振るうが容易く受け止められ、少女との距離を離すも間合いを詰められ、つばぜり合いに発展する。

(服装を動きやすいのにしてる性か、動きが速えし、俺と同等に張り合えてる……それに剣の腕も実戦慣れしてやがる……!この女……何者なんだよ!?)

つばぜり合いの際に、銀時は少女の戦い方が意外にも実戦に慣れた剣術を使う事に驚いてもいるが、それ以前に少女の瞳の色が輝いていない事が気にかかっていた。

(それにしても……こいつの目……何か妙だ……出会った時も、こうやって戦ってる最中でも表情一つ変えてねえ、もしかしたら誰かに操られてんのか?でも一体誰が……)

銀時は少女の無表情であるのが、洗脳されていると推測するも……誰が何の目的でやっているのかが分からず苦い顔をする。だが、少女はお構い無しに木刀を弾いて刀を降り下ろすと銀時は木刀で受け止めて迫撃するという繰り返しなのぶつけ合いが始まった。

—————

「ふうくん、面白い事になってんじゃない……」

銀時と少女の死角がある場所で傍観し、様子を伺っていたガリイはギザギザの歯を見せながら嘲笑していた。

「それにしても、あの天然パーマ……一体何者なのかしら?」

少女と同等……いやそれ以上の剣技を使う天然パーマ。銀時にガリイは少しばかり興味が沸いた。そして悪巧みを思いついた顔をし、

何処かへと通信を繋げる。

「こちらガリイ……………マスター応答願いますう〜?」

『どうした?何かトラブルでもあったのか』

「いえいえ、ターゲットは見つけましたよ?でもお〜 変な奴がターゲットと戦闘を始めちゃってえ……………ガリイ困ってますう〜」

『変な奴?……………エル、映像を出してくれ』

『はい、スクリーンに映します』

一旦、静寂が始まり……………数分後に通信が再開された。

『ガリイ……………この男は何者だ?グレモリーの小娘の手先か?』

「いえいえ、どう見ても”脳内お花畑お嬢様悪魔”と無関係の人間ですよ?しかも生身でやり合ってるし……………どうしますう?」

『そうだな……………できるならターゲットも含めてそいつも此処シヤトに連れて来い……………もしターゲットが逃亡したり、グレモリーの小娘供が来たらそいつだけでも良い……………判断はお前自身に任せる』

「は〜い☆ガリイにお任せです♪」

そう了承すると、ガリイは再び銀時達の戦いを傍観し始めた。

—————

一方、銀時と少女の戦いも熾烈を極めるモノとなっていた。

少女は銀時との距離をとって再び刀を大剣に変形させると青いエネルギーを纏わせた後、青い斬撃を銀時に目掛けて二刃飛ばした。

### 《蒼ノ一閃》

「そんな『月牙○衝』モドキにやられるかよ!!」

対する銀時は勢いよく走りながら斬撃をかわし、もう一つは木刀を横風ぎにする事で霧散させ少女との距離を詰めようとする、少女は向かってくる銀時の懐に飛び込んだ。

銀時が木刀を横風ぎに振るって迎撃すると、少女はしやがんで回避する。そして、懐に入った状態で逆立ちとなり、開脚したその後、足についた刃が鋭くなる。そして、その状態のまま回転しながら銀時を斬りつける。

### 《逆羅刹》

「なっ！それも武器になるのか……………ぐはっ!」

その様な攻撃方法がある事に驚き、気を緩めた銀時に迫る刃…………だが、銀時はとつきに木刀で捌くも勢いが強すぎて後ろに吹き飛ばされる。銀時は木刀を地面に突き刺してブレーキ代わりにする事で勢いを殺し、体勢を立て直す。

そして少女の方も後ろに跳び、体勢を立て直した後、再び刀を取りだして構える。

「へっ！やるじゃねえか…………ならこつちも十八番<sup>オハコ</sup>って奴を使わせてもらうぜ?」

銀時はを苦笑しながらも額の汗を拭いた後、俊足で自分の得意とする間合いを詰め木刀を横風ぎに振るうが、少女は刀で受け止めて距離



を取ろうとするとまた間合いを詰め、迫撃していく。徐々に銀時が有利になっていくが、少女はつばぜり合いの際に、片手にもう一本の刀を取りだし銀時に突きを繰り出す。銀時は身体を反らせて突きを回避すると、一旦距離を離す。

そして少女は先程出した刀と持っていた刀の二本の柄同士を連結させ、薙刀状態にし回転させながら臨戦態勢をとる。

「おいおい、一騎討ちがご所望って奴ですか？…良いぜ？その勝負受けて立つ！」

相手が一気に勝負を決める事を知った銀時は木刀を腰に差し、居合いの構えで少女と同じく臨戦態勢をとる。ジリジリと構えながら集中力を研ぎ澄ませ、勝負のタイミングを見計らう。

すると少女が持っていた刀に炎が纏われていく事を驚く銀時だが、相手も本気で来ると悟り…自分も奥底に封じ込めていた白夜叉の力で迎え撃とうとする……………

「そこまでよー！」

が、ここで思わぬ邪魔が入ったのは言うまでもない。

「あっ？」

「……………」

勝負の最中に声がした方に目を向けると、そこには何処かの学校の制服を着た集団が居た。

紅髪の少女を筆頭に、黒髪と金髪の少年二人とポニーテールの美女、そして白髪の小柄な少女が現れたのだ。また面倒な奴が現れたと

先程までの雰囲気が無くなり、死んだ魚のような目で集団を見る銀時。一方の少女は刀を納め、手に持った黒い結晶を地面に投げると、足元から淡い黒の魔法陣が出現し、その場から姿を消した。

「なっ!?おい!」

「動かないで!まずはこちらの質問に答えてもらおうわよ?貴方は何者?ここが私、リアス・グレモリーの領土と知っての事かしら?」

紅髪の少女ーリアスが妙に見下した質問をするのに対して銀時は気怠い態度で応答する。

「さあな?まあ……強いていうなら神様のミスに巻き込まれた侍つてところだ……それと領土って何よ?ガキが王様気取りですか?コノヤロー」

「おい!リアス部長に対してその態度は何……痛っ!?何しやがる小猫!!」

「……久沢先輩、うるさいから静かにしてください」

「てめえ、後輩の癖……ゴハツ!」

銀時の発言に噛みついてきた黒髪の少年ー久沢は足を踏みつけた白髪の少女ー小猫を怒鳴る。だが、小猫はギャーギャー喚く久沢の鳩尾にボディブローを決める。リアスはお構い無しに銀時に再度、質問をぶつける。

「なら、貴方と戦っていた女は何者なの?」

「そりゃこつちが聞きてえよ……変なコスプレしてるわ、妙に強いし

よお……だが、何処ぞの王様気取り女のせいで勝負が決まらなかったけどな？」

「ツ……それは私に対する侮辱なの？ 私は悪魔72柱の誇り高き貴族グレモリー家の次期当主なのよ！」

「悪魔って何？ 中二病ならまだ良いの言うぜ？ それと何が当主だよ……次期ってまだ当主にもなつてねえじゃねえか、お家がちよつと良いご身分だからつて油断していると足元すくわれるぜ？ 中二病で次期当主のお嬢様？」

「に、人間の分際で……「はいはい、そこまでにしてくんない？」……ガッ!」

銀時の言葉にリアスは激怒するが誰かに蹴飛ばされ、顔が地面に埋まる。蹴飛ばした張本人ーガリイはフィギュアスケート選手のようにスピンジャンプをしながら銀時の前に降り立つ。

「先程はどうも、天然パーマ侍さん？」

「先程……って、おい！ 誰が天然パーマだ!? 俺だつてな好きで天然パーマになったんじゃねえんだよ!!」

「まあ、まあ♪そうゆうのいいじゃないですかあ？ 過ぎた事は水に流して……でも、まずは邪魔なアイツ等から……」

そう言いながら銀時の憤慨を無視して、ガリイはリアス達に視線を向けて両手に水の塊を纏わせ、上に掲げると同時にそこから水の竜巻が発生しリアス達の周りを包围する。続けて右手から魔法陣を展開し、そこから強烈な吹雪を放つ。すると水の竜巻は吹雪を浴びると瞬時に凍り、リアス達を閉じ込めた氷の塔と変化した。

「さてと…ん？ああ、問題ありませんよ？殺してませんから。だって殺ったら殺ったでマスターにドヤされますものお〜」

「その前に、てめえは何者だ？人間技にしちやあ変な術使うじやねえか……」

「まあ……自己紹介ぐらいいいかしら？私の名前は、ガリイ・トゥー  
マーン。我がマスターにして創造主……キャロル・マールス・デュー  
ンハイムに仕える自動人形部隊……オートスコアラ【ナイトクオーターズ終末の四騎士】の一人です☆」

「オートスコアラ？」

「細かい事とかは置いて……すみませんが、マスターは貴方を  
招待しております……一緒に来てくれませんか？」

ガリイはニヤリと黒い笑みをこぼすが、銀時は少しだけ思考を変え、渋い顔をしながら考えてみる。リアスは自分を悪魔と名乗っていた。もしかしたらこの世界には自分の世界とは違う何かがある。そしてまだ自分はこの世界には馴染んでいない……しばらくはガリイ達の所で過ごしながら情報交換をする必要があると実践してみた。そして、数分考えて銀時はある答えをガリイに告げる。

「まあ、良いぜ？この世界の事とか色々知らなきゃなんねえしな  
………それに」

銀時は、先程戦った青髪の少女が頭を過った。もしかしたらガリイのマスターなら少女の事を知っているかもしれないと思ったからだ。すると、ガリイが興味深そうに顔を覗かせる。

「あらん？…どうかしました？」

「何でもねえよ……さ、そのマスターって奴の所に行こうじゃねえか」

「では、ご案内いたします♪」

ガリイはそう言うと、ポケットから手のひらサイズの紅い結晶を取りだし、地面に投げつけると六角形の魔法陣が銀時とガリイがいる足元に形成され、次の瞬間に二人は氷の塔に閉じ込められたリアス達を残し、その場から消えた。

キヤスト

坂田 銀時：杉田智和

謎の少女：水樹奈々

リアス・グレモリー：日笠陽子

久沢 戒斗：小野大輔

塔城 小猫：竹達彩奈

キャロル・マールス・ディーンハイム：水瀬いのり

エルフナイン・マールス・ディーンハイム：久野美咲

ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

## 第惨話 チフオージユ・シャトー

ガリイと共に転移した銀時が最初に目に写ったのは、自分の世界の城よりも……悪友のペット兼侵略者が乗っていた星と同じく広大な空間に機械の部品やら、巨大な歯車等が所々に組み込まれていた。銀時はまるで巨大な要塞の内部に社会科見学をしに来た気分になり、少しばかり冷や汗をかいた。

「な、何だ？ここは……」

「マスターが鎮座する、巨大装置兼居城……〔チフオージユ・シャトー〕の内部……まっ、言うなれば私達の本拠地つて所よ」

「しっかしでけえなあ〜？……てゆうか、お前口調変わってなくね？」

「あ”あ!?”堅苦しい言葉とか似合わない主義なのよ……ほら、遅れて迷子になっても知らねえぞ？天パー侍？」

「（あつ、こいつ性根が腐ってんな……）へいへい、わかりましたよ……つて、誰が天パー侍だ!!」

ガリイの突然の変わり様に銀時は性根が腐っていると確信し、呆れながら彼女の後についていく。すると、銀時達の前に何か勢いよくこつちに向かって来た。

「ガア〜リ〜イツ!!お帰りだゾオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ほいつ」

「えっ？……ボゲラッ?!?!」

勢いよく向かって来た何かをガリイはスピンをしながらかわすも、後ろにいた銀時は直に直撃し何かと共に後方へとぶっ飛ばされた。すると向かって来た何か……否、一人の少女は、何事も無かった様に起き上がる。

赤髪をツインドリルにし、服装は焦げ茶色のケープを纏い、ピンクの長袖シャツに黒のショートパンツ。そして、熊手の様に鋭い爪がある大きな両手を持っていた。少女は満面の笑顔でガリイに抱きつく。

「ガリイく 寂しかったゾ〜！」

「だああ!?!もう、てめえはいつつもいつも私に抱きつかねえと気が済まねえのか!?!つか、うっとおしいから離れろ!!!」

「イヤだゾ！五分ぐらいギューさせてくれゾー！」

「てめえに五分間抱かれたら、身が持たねえんだよ!?!離れろ、この！ハッナ〜レ〜ロオ〜!!」

力強く抱き締める赤髪の少女を必死に引き離そうとするガリイだが、少女の抱き締める力が強いのかなかなか振りほどけずにいた。すると少女と激突した銀時はフラフラと起き上がる。

「あ、あの……銀さん、重症なんだけど………助けてくんない？」

必死の助けを求めるも、ガリイ達の耳には届かず銀時は再び地面とキスをしながら倒れる。

そこへ黄土色の髪を緑の紐で四本に束ね、執事服を思わせる黒いドレスを着用した女性と、短い黒髪にカジノのデューラーを思わせる服装の女性が現れる。

「あら、帰ってたのねガリイ」

「また派手にやってるな……」

「”レイア”! ”ファラ”! ボケツと見てないで”ミカ”のバカを何とかしなさいよ!! これじゃマジでヤバイって!!」

ガリイはやって来た二人の女性……レイアとファラに、抱きついて  
いる少女ーミカを何とかするように叫ぶが、二人は喚いてるガリイの  
後ろで倒れている男……銀時に目を向ける。

「おいガリイ、何だその地味な男は」

「ああ……任務の時に出会ってね、マスターから連れてくるよう言わ  
れたのよ……ってか! そんな事より、早くミカを何とかしろ!! マジで  
絞め殺されるって!」

「ガ〜リイ〜♪」

「ワタシ達自動人形は、そんな程度では派手に死なん」

「そうだろうけどマジで非常事態的にヤバイんだよ!!」

まるで犬の様にじやれつきながら抱きつくミカに、必死に引き剥が  
しながら助けを求めるガリイと助けようとせずいつも通りの光景で  
眺めるレイア……何ともカオスな光景が出来ている。そんな中、ファ  
ラだけは倒れている銀時の元へと駆け寄る。

「もしもし、そこの御人……」

「……………」



ファアラが声をかけるも、銀時は気を失ったままで……まるで屍の様だった。返事が無いのを確認すると、ファアラは銀時を起き上がらせ、首元に手刀を入れる。

「……ッ!?!……あり?俺………何してたんだっけ?」

「お気づきになりました?」

「え?あ……ああ、大丈夫だ……ありがとな……えっと………」

「私はファアラ・スヌーフ。【終末の四騎士】のリーダーを務めております……よろしければファアラとお呼びください」

「そうか、俺は坂田 銀時だ。気軽に銀時か銀さんと呼んでくれ」

「では、銀時様と呼ばせてもらいます」

「様付けには慣れねえが……いいぜ別に………と言うか、アレ止めなくて良いの?」

銀時は、礼儀正しい対応をするファアラにいつまでも騒いでるガリイ達の方に指をさす。

「ああ、そうでしたわね……ほら、三人とも!お客人の前よ、その辺にしときなさい」

「その前に……いつをどうにかしろよ!」

ファアラは銀時の側を離れると、残った三人を嗜める。しかしガリイはミカを何とかするように要求すると、ファアラはため息をしながらミ

カカの両腕を優しく掴みながら目の前に立たせる。

「ミカ、ガリイに抱きつくのはその位にして……まずはお客様にご挨拶しなさい」

「わかったゾ」

「レイアもまだだったわよね？」

「そういえば地味に忘れていたな」

そうミカに言い聞かせると、ミカは素直に返事をする。レイアもフアラに指摘され、ミカと共に銀時の所まで歩み寄る。

「先程は失礼した……ワタシは【終末の四騎士】の一人、レイア・ダラーヒムだ。派手によく頼む」

「ミカ・ジャウカーンだゾ！よろしく!!」

「よろしくな、俺は坂田 銀時。名字以外なら好きに呼んでもいいぜ」

「なら、銀時と派手に呼ばせてくれ」

「アタシはギンって、呼ぶゾ！」

「派手に呼ばせてって……何処ぞの宇宙海賊戦隊的な事言うな……」

「ワタシに地味は似合わない……」

「いや、カッコいいセリフ言っても理由になってないからね!？」

レイアの決め台詞にツツコミを入れる銀時、するとミカは笑顔で銀時をジッと見つめる。

「何？俺の顔に何かついんての？」

「ナア、その変わった棒みたいなのは何だゾ？何でソレを腰に挿してるんだゾ？」

「こいつか？こいつは刀と言ってな、侍の魂みたいなもんだ」

「サムライ？何だゾ、それ？」

聞き慣れないワードに、ミカはわからないという顔をする。銀時は自分なりにミカに侍とは何かを告げる。

「いいか、侍つてのはな……自分の武士道<sup>ル</sup>を掲げ、それを貫き通し……自分が思う生き方、仲間を護る意思を魂に刻んだ奴等……それが侍だ」

「ふうくん、アタシには難しい事はわからないゾ……でも、サムライはスゴいってわかったゾ！それに、そんな事知ってるギンもスゴいゾ！！」

「別にスゴかねえよ……俺なんて……」

『？』

ミカが銀時の事を称賛するが、銀時はスゴくないと返す。すると……ファアラ、レイア、ガリイの三人は銀時が少し暗い表情をしていたのが気になったが、それは後回しにしようと考えたガリイは、口を動かす。

「はいはい……馴れ合いはそこまでにして、早くマスターの所に報告しないと行けないんだけど?」

「そうだったわね……では、銀時様。我々がマスターの所までご案内いたします」

「おっ、サンキューな」

そう言つて銀時は四人に案内されながら、この城の主が待つ場所へと向かった。

――

一方、銀時達が去つた廃ビル内ではリアス達グレモリー眷属を閉じ込めてある氷の塔の真ん中にデカイ穴が空き、その側ではポニーテールの女性―姫島 朱乃と、金髪の少年―木場 祐斗がバラバラにされている肉片を発見した。

「やはり……指名手配されているはぐれ悪魔のバイサーですわ。しかも無残に惨殺死体で……」

「このヤリ口……噂の「人外狩り」ですか?」

「ええ、おそらく先程の女性がその一人でしょう……」

数分前、自分達がはぐれ討伐でこの廃ビルに訪れ、その最上階で戦闘をしていた二人の男女……決着をつけようとした瞬間にリアスが叫ぶと女性は魔法陣で逃亡し、男性の方は謎の少女の介入により自

分達は氷の中に閉じ込められ、脱出した後には二人共姿を消したのだ  
……

「小猫ちゃんのおかげでかろうじて脱出できましたが……」

「はい……問題は……」

二人はその近くに視線を向けると……塔に穴を開けた少女―塔城  
小猫と黒髪の少年―久沢 戒斗かいとが辺り構わず口論を繰り広げてい  
た。

「てめえ……一年の分際で生意気なんだよ！」

「……だからなんですか？まさかあの壁を壊せると思ったんですか  
？」

「はっ！あんな氷の壁程度、オカルト研究部の超新星である俺ならモ  
ノの数分で破壊できたんだよ!!それをてめえがぶっ壊しやがって  
……」

「……何がモノの数分なんですか？私の記憶が正しければ、十分の間  
……久沢先輩は必死に殴り続けても壊れなかったと思うんですけど  
？」

「チッ！あれは、まだちょっと調子が出なかつただけだ！」

「……言い訳ですよ、それ？バカですか貴方？」

「このガキ!!もう一片、言ってみ……グベツ!!」

小猫の罵倒に、久沢は殴ろうとするも……小猫はそれよりも速く、

久沢の顎めがけてアッパーを繰り出した。久沢はモロに食らい天井に突き刺さった。

朱乃と木場は久沢の態度に呆れ、ため息をはく。

その一方、リアスは爪を噛みながら先程の銀時の発言に、怒りを表していた。

「あの男……たかが人間の分際で……！この私を、悪魔であるこの私をコケにして！絶対に許さない……この屈辱は必ず数百倍にして返してやる!!」

湧き上がってくる憎悪をただただ思い、リアスは銀時に屈辱を味わせてやると心の奥底で決意を固めていた。

—————  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

リアス・グレモリー：日笠陽子

久沢 戒斗：小野大輔

姫島 朱乃：伊藤静

木場 祐斗：野島健児

塔城 小猫：竹達彩奈

フアラ・スユーフ：田澤茉純

レイア・ダラーヒム：石上静香

ガリイ・トウーマン：村瀬迪与

ミカ・ジャウカーン：井澤詩織

## 第肆話 侍と錬金術師の邂逅

キャロル side

『すまねえな、お前さんを危険なヤマに付き合わせちまつて』

「気にするな、オレも進んで受けた事だ……オレはオレで動き、お前もそれを実行する。……ただそれだけの事だ」

オレは玉座に座りながらとある友人と連絡をとっていた。そいつは悲観しながら謝ってくるが……オレはなんとも思っていない、むしろ協力したいくらいだ。

「グレモリーの小娘がちよくちよく邪魔をしてくるが、……もしあのじやじや馬がへまをして、戦争に繋がれば……今度こそ世界は終焉を迎える………」

『………わかった、後でサーゼクスにお前さんが来るって連絡しておくよ……もう、あんな戦争は御免だから……』

ツ!?しまった、オレとした事が安心させる処か返って不安にさせるとは………!

「………辛い事を思い出させてすまない」

『気にすんな………じやあな、また』

「ああ………また」

そう名残惜しそうに通信を終え、オレは深くため息をはいた。

先ほど連絡をとっていた友人の名はアザゼル、墮天使陣営の総督を

している男でオレが心を許せる友人の一人にして……

片思いの相手だ……………

――回想――

……そいつと出会ったのは数千年前、オレが弟のエルフナイン、配下の自動人形達と共にこの城を完成させた翌日に次元の歪みから傷だらけの状態で現れ、昏睡状態となっていた。

人外を助けても、奴らはオレ達人間を見下すに決まっている……

そう思つて暫くの間、様子を見る事にした。治療はエルに任せる事となり、時々ガリイやミカに手伝いをさせながら監視する様に仕向ける。ファラとレイアには外の世界で何が起こっているのか偵察を命令し、判明したのは三大勢力の派閥争いだった。

やはり奴らは己の事だけしか頭には無いと改めて知った。この男も同じではないかと疑いの目を向けた……だが、この男……いや、アザゼルは違った。

それはコイツを療養して2日が経過し、オレが様子を見に行つた時の事だった。オレが部屋にやって来た瞬間に、アザゼルはゆっくりと瞼を開け、部屋の辺りを見渡した後……オレを見つめるとこう言った……………

『おいおい……堕天使の俺には似合わない綺麗な女神様だな……………』



そう告げられた瞬間にオレは身体中が熱くなるのを感じ…頭から蒸気を発しながら気を失ってしまった。

数時間後、意識を取り戻しエルに何があつたか尋ねてみるとオレが気を失った後、ファアラ達があつた男を地下牢に閉じ込めたと教えてくれた。

オレは警護担当のレイアと共に男を閉じ込めている地下牢に向かった。

もしかすればオレを騙す為の嘘だとすればその場で処理する考えだったが…あろうことかアイツは笑いながらこう言った。

『そうだよな…墮天使の俺が天国に行けるハズねえよな…でもよ、お前さんの様なすんげえベツピンさんだったから綺麗な女神様と勘違いしちゃったんだ…本当にワリいな』

どうやらオレを騙すつもりも無く、本当に思った事を口に出していたらしい。オレはそれを知った瞬間…胸が高鳴るのを感じた。

その後も地下牢に閉じ込めたアザゼルの事が頭に離れず…食事が喉を通らず、夜もおちおち眠れず、ボーっとしたりと…変な行動をとる様になってしまった。

オレのあまりの変わり様にファアラは母性に目覚めたのかオレの体調を心配したり、レイアはオレがおかしくなった要因がアザゼルにあると考えて尋問を繰り返したり、ガリイはオレへの対応が可笑しいのを見て目眩がしたのか休んで寝込んだり、ミカは…ミカはいつも通りだな…と自動人形達も混乱していた。

そんな日が5日過ぎた頃、オレは気分転換に書庫へと足を運び本をあさりながら読んでいた。すると、一冊の古い本が目に入った。それはパパがオレ達の為に買ってくれた童話集だった。懐かしいのを見

つけたオレは本をペラペラと飛ばし、ある物語に目をつけた。

それは魔女に呪いをかけられ、永遠の眠りについたお姫様を隣国の王子が仲間と共に助けに向かい、そして二人は愛し合い結婚するという物語だった。

愛……？もしかすればオレは……アイツを……あの墮天使に恋愛感情を抱いているのか!?

いや、あり得ない！オレは森羅万象を司る術を身につけた錬金術師だぞ!?!それも人外の……墮天使の男に恋心を持つなんて……

でも……否定しようとすれば……忘れようと思うと………何故か儂く感じ、心が痛む………

そして数日が過ぎ、オレらしくも無く………この胸の濁りをエルに話してしまった。オレが姉なのに、困ったら弟に頼るなんて……

すると、エルは微笑みながらオレにこう告げる。

『別に可笑しい事じゃないと思いますよ？恋と言うのは自分で気づかない所でも相手の事を考えてしまつて、好きという感情を抱いてしまうものだとボクは思います。だから姉さんは姉さんの方法で恋を頑張ってみたらどうでしょうか?』

オレのやりたい事………エルにそう言われたオレは少しずつではあるが地下牢に赴き、アザゼルと話す様になった。

アザゼルの話を聞いてみたら………自分も戦争で部下や多くの戦友

を失い感じた悲しみ、守れなかった悔しさ……戦争を肌で感じたその悲惨さ……そして、何故生き物は上を目指したがり、殺し合わなければならぬのか……そればかり、戦場で考えていたらしい……

そして、オレも気がつけば自身の過去を話す様になった。

パパが残した錬金術の研究技術を受け継いで弟と共にこの居城とフアラ達を作った事。

錬金術の技術で、オレ達姉弟は人間よりも寿命が長引いた事。

そして、錬金術を使ってパパが実現できなかった『世界を知る』をオレ達で実現させる事。

過去の事を話していたら……何故か心が軽くなった。こうして誰かに話すのはエルとフアラ達だけだったから……

そして、アザゼルもオレの話を聞いて少し笑みをこぼしながら言った。

『すげえな……弟さんと一緒に親父さんの意思次いで、こんなバカデケエ城も建てて……そんなでもって親父さんのできなかった事やりとげようとするなんてな……それに比べて……俺は何もできなかった……目の前で消えてく仲間を救えなかった……情けねえ………俺に、俺にもっと力があれば………！』

アザゼルは顔をうつむけながら泣いた……救えなかった仲間に対する懺悔と、自分だけが生き残ってしまった後悔……そして自分の不甲斐なさに対する怒りを感じた。

戦争を知らないオレが慰めても……同情されて余計にアザゼルを追い詰めるだけだ……ならオレはオレのやり方でやるだけだ、そう思いオレは牢の扉を開け、アザゼルに歩み寄って優しくも強く抱き締めながら、こう呟いた。

『なら……お前みたいに悲しい思いをした奴等に手を差しのべろ……別に死んだ仲間や辛い事を忘れろなんて言わん。なら、自分みたいに辛い目や心に深い傷を負った奴等を救ってみろ……そうすれば、少しでも死んでいった仲間に顔向けができるじゃないか……もし、お前が困っていたり、自分でも解決できない事が合ったら……オレが協力するし、力になる……だから、もう自分を悲観するのは止めてくれ……これがオレからお前に唯一できる頼み事で……オレへの願いだ……』

――回想終了――

出来るなら……アイツの願いを……三大勢力との和平を成立させて人外と人間が共存できる世界を実現させてやりたいし、アイツの心の支えになりたい。

そして……アザゼルが嫌いな戦争を二度と起こさせたくない……これ以上、人外同士で戦争をすれば……間違い無く多くの死者が出る処か、またアイツが悲しむし、戦争を望まない人外達も二の舞にさせたくない……

もうアイツの……アザゼルが泣く姿なんて見たくないんだ……

!!

「姉さん？姉さん！」

「エルか……」

回想に浸っていたら、ふと弟のエルが部屋に入室していた。

「どうしたの？泣いていたみたいだけど…」

オレとした事が……また、泣いてたんだな……

「ああ……ちよつとな、話は変わるが……ガリイは戻って来たのか？」

「はい、それと例の男性も連れて来たと報告がありました」

「そうか……」

その報告を聞いたオレは涙を拭って玉座に背を凭れ、頬杖をつく。すると扉から性根が腐った声が響いてくる。

「マスターア〜♪【終末の四騎士】が一人、ガリイ・トゥーマーン。ただいま任務から帰還致しましたあ〜☆」

「同じく【終末の四騎士】……ファラ・スーフ、レイア・ダラーヒム、ミカ・ジャウカーンも御座しましてございます」

「入れ……」

オレが入室を許可すると扉が少しずつ開き、そこからオレの配下である四人の自動人形達と、銀髪の天然パーマに黒い半袖シャツとズボン、その上に白い着物をはだけさせ、腰には木刀をさした死んだ魚の目をした男がやって来た。

ガリイが送ってきた映像の男で間違いは無いだろう。それに、ターゲットとも木刀一本で互角で張り合えたんだ……ただ者では無い事

だけは確かだな……

そう思っていたら、銀髪の男が口を開いた。

「アンタがガリイの言ってたマスターって奴か？」

「まあな……オレがこの居城、【チフォージュ・シャトー】を治める錬金術師……キャロル・マールス・ディーンハイムだ。そして横にいるのは弟のエルフナインだ」

「初めまして、エルフナイン・マールス・ディーンハイムです。エルとお呼びください」

「そうか、俺の名前は坂田 銀時……まあ、こう言うのもなんだが……異世界から来た侍だ」

「異世界？」

「さ、さむらい？」

銀髪の男―坂田 銀時は異世界から来たと言ってきた。エルは侍と言う単語に頭を傾げていた。まあ……聞いた事のない単語だからな……そう思っていたらミカが未だにわからないエルに歩み寄って、話しかけた。

「エル、サムライってのはスゴいんだゾ！仲間を護ったり、自分のルールとか作ったりとついてもスゴいモノなんだゾ!!」

「そ、そうなんですか？」

「うん！アタシもさつき教えてもらったんだゾ!!」

何かこっちもこっちで白熱してる……まあ、そんな事よりも  
……………

「ガリイ、状況報告の方を……………」

「ええ、ターゲットを補足した所をその天パーがやって来て、それで  
戦闘が勃発して張り合ってる最中に問題お嬢様御一行が邪魔して  
ターゲットは逃亡……………ですからこの天パーを連れて来た……………とい  
うのがガリイちゃんからの報告です♪」

「おい、てめえ天パーに恨みでもあんのか？そんなに天パーが嫌いか  
コノヤロー」

「えっ？天パーだから天パーって言っただけですけども？その何が  
悪いのかしらあ？天パー侍さぁん♪」

「そうかそうか……表出ろコラア!!勝負じゃああああ!!」

ガリイの報告（若干性根が腐った内容）に、坂田が青筋をたてな  
がら木刀を抜いてケンカが勃発した……………こいつの性根の腐った性格  
は……………オレ似なのか……………そうじゃないのか……………頭痛がしてき  
たと思っっていたらファアラが二人を止めに入る。

「銀時様、マスターの御前です……………お怒りをお沈めくださいませ  
……………ガリイ、おふざけもその辺にしなさい!」

「……………わーっつたよ」

「けっ!」

流石はファアラだな……………話を戻そうとオレは咳払いをした。

「話は戻るが……坂田、お前は異世界から来たと言ったな……それはどういう意味だ？それとお前は何者なんだ？」

「ああ……順におつて説明するからよく聞いてけよ。それと、俺への説明が終わったらこの世界の事を教えてくれるか？」

「わかった……約束しよう」

そう約束し、坂田は自身に起こった出来事を語りだした。

坂田は江戸と呼ばれる世界の住人である事。

その江戸では天人あまんとと呼ばれる宇宙人がやって来た事。

天人がやって来た事によりこことは違う文明の進歩が始まり、坂田はその世界で【何でも屋】を営んでいた事。

そして、坂田は神の手違いで死亡し……この世界へと飛ばされた事。

未だに信じられない発言だが……この男は嘘を語っているとは思えない……それが事実なのだとして理解して信じる事にした。

「……………と、これが俺が今、説明できる所ぐらいだな……」



「そうか……感謝する………」

「あり？意外と信じてくれんだな……」

「未だに宇宙人が現れたとは信じられないが……お前の口振りで嘘を語っているとは見えないからな……さて次はオレの番だな……」

「ああ、頼むわ」

坂田が自身の事を話し終えたので約束通り、オレはこの世界での出来事を話した。三大勢力と幾万年前に勃発した戦争の事、この地を我が物顔で管理しているグレモリーの小娘の事、そして人外を狩る奴等の事を……

「……以上がオレが把握している、この世界の現状だ。あの小娘の管理不始末のおかげで……あの町はぐれ共に溢れ……指名手配されていたりよからぬ事を目論む上位悪魔や墮天使共の隠れ蓑となった……もし、あの小娘がヘマをすれば……幾万年に決着した戦争がまた始まり、多くの罪も無い人外や人間達が死ぬ事になる」

「そうか……何処の世界でも戦争はあるもんだな……キャロル……俺もこの件に乗るぜ、せっかく何年も前に終わった戦争を、もう一回とおっぱじめる訳にはいかねえだろ？」

「……オレ達に協力してくれるのか？」

「まあな、俺は頼まれた事は何でもやる万事屋だ……それと条件がある」

「……条件？」

坂田は何処か決意のある顔をオレに向けながら、協力する条件を言ってきた。

「俺はこの世界に来て、まだ住む所も決まっていねえ……だから此処に住まわせてくれねえか？もちろん衣食住付きで協力料は高いぜ？」

坂田はニヤツと笑いながら、指で金のマークをした。いやはや……こんな奴は初めてだな……

「いいだろう……その依頼金は任せておけ」

「交渉成立だな……それでなんだがよ……聞きてえ事がある」

「なんだ？大概の事は答えてやる」

「俺があこのビルで戦ったガキは何者なんだ？お前もそのガキに用があるんだろ？」

「その事か……それについてはエルが専門だ……エル、坂田への説明は任せるぞ」

「は、はい！あ、あの！よろしくお願いします!!」

「おう、よろしくな」

「それと、お前には【終末の四騎士】全員をつける……四人共、くれぐれも坂田をサポートしてくれ」

「畏まりましたわ」

「派手に承知しました」

「がんばるゾ!!」

「まあ、マスターのご命令であれば仕方ありませんね?」

これでよし……そう言えばアイツにも声をかけるとするか……オレは玉座から立ち上がり、テレポートジェムを床に投げ、転移術を発動させた。

「それじゃあ、仕事の方は任せただぞ坂田……オレは少しばかりここを離れる。エル、オレが留守の間……シャトーを頼む」

「うん、気をつけて」

「無茶すんなよ」

「ああ……」

そう言い残し、オレは知り合いの所へ向かうためシャトーを後にした。

-----  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

アザゼル：小山力也

キャロル・マールス・デインハイム：水瀬いのり

エルフナイン・マールス・デインハイム：久野美咲  
ファラ・スーフ：田澤茉純  
レイア・ダラーヒム：石上静香  
ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与  
ミカ・ジャウカーン：井澤詩織

## 第肆之伍話 鍊金術師と雷光の巫女

朱乃 side

私は自宅である姫島神社とある人物と鳥居の前で待ち合わせをしていた。

そうして待ち続けて10分が過ぎた頃……その人物は魔法陣から姿を現して、こちらに視線を向けた。その人は金髪の三つ編みに、魔法使いが使用する様な大きな帽子と青と白を基調としたローブを纏った二十代の女性でした。

この女性こそが、私が待ち合わせをしていた方で命の恩人に当たる御人……私は手に持った紙封筒を待ち合わせていた女性……キャロル様へ両手でお渡しした。

「キャロル様、お待ちしてましたわ。この封筒の中には、過去に駒王町で起こった事をまとめた資料が入っています」

「そうか……すまないな、こんな頼みをバラキエルの娘であるお前に任せて……」

「うふふ……いえ、キャロル様は私とお母様の命の恩人でお父様の古くからの御友人であるアザゼル提督をお救いになられた御方です。これが私、姫島 朱乃に出来る貴女への恩返しですから……ご心配無く。それで例の「人外狩り」の件ですが……」

「ああ、ガリイの働きで十分なデータは取れた。後はエルとアイツの仕事だ……」

「アイツ？それは何方様で……」

「昨日の晩、お前達が出会った銀髪の男だ」

「銀髪…ああ、あの時の殿方ですか……」

私がこの町の統治者であるリアスの眷属として潜りこんだ理由は、この町でのリアスの怠惰な駒王町管理の証拠を得るため……

そして度々、はぐれや墮天使……さらには契約悪魔等を狩る集団……上層部の方達から「人外狩り」と呼ばれた少女達への情報を探るために、あえて私達グレモリー眷属が向かう場所をキャロル様達にこっそりご報告していた。

そして、先日の晩ではぐれ討伐の際に遭遇したのがあの銀髪の男性……生身で「人外狩り」の一人と戦っていたため、ただ者では無い事だけはわかりました。それに傲慢なリアスにも平気で侮辱を味あわせた勇敢なお人だと思いましたわ……

「男の名は坂田 銀時……死んだ魚の目をしてひねくれているが、協力を申し出てくれた奴だ……接触の際はよろしく頼むぞ」

「畏まりました…キャロル様はこれからどちらへ？」

「オレは今からサーゼクスと三魔王の所へ行つて、この証拠を見せる……そうすればあの小娘をこの町の支配者の座から引きずり下ろせるからな？お前もわかっているだろうが……」

「ええ、三大勢力の戦争の再戦阻止……従順、承知しております」

「わかっているならそれで良い…それじゃ、バラキエルと朱璃よろしくと伝えてくれ」

「はい、お気をつけて……」

私はその場で一礼し、キャロル様は転移術を発動させて姿を消し

た。

キヤスト

姫島 朱乃：伊藤静

キヤロル・マールス・デインハイム：水瀬いのり





滅した。

「……………」

少女は男が居た場所に突き刺した刀を引き抜き、その場を後にしようとした瞬間……後ろから紅い波動が襲いかかる。だが、少女は後ろに跳躍して避けるも後方から雷撃が追い討ちをかける。だが、直撃する瞬間に刀を取り出してそれを弾くと同時に構えると木陰からリアス達グレモリー眷属が現れ、少女を取り囲んだ。

その後、リアスが我先と口を開く。

「ようやく見つけたわよ……直接挨拶するのは初めてかしら【人外狩り】さん？私は栄光ある悪魔72柱の貴族、グレモリー家次期当主にして……この駒王町の管理者、リアス・グレモリーよ」

「……………」

「早速だけど……今から私が言う質問に答えてもらうわよ？まずは貴女は何者？何故私の領地で無許可にはぐれ悪魔や堕天使の討伐を繰り返すのかしら？」

「……………」

（イラッ！）「なら、質問を変えましょうか……貴女は誰の指示で動いているの？まさか、堕天使や天使の二大勢力のどちらかの上層部が関係しているのかしら？」

「……………」

質問を黙する少女の態度に、リアスは眉をひくつかせ苛立ち始め

る。下等な人間が人外を滅ぼす事など不可能……神器ならまだしも謎の力で戦う相手だ。もしかすれば神滅具ロンギヌスと同等なのかも知れないが……そんな事はあり得ない……そう考えたリアスは口を動かす。

「そう……あくまで私の質問を無視するなら、こちらにも考えがあるわ……カイト、貴方の力を見せてあげなさい」

「わかりました……ブーストテッド・ギア赤龍帝の籠手!!」

《Boost!!》

久沢はそう叫ぶと左手に紅い光を纏わせた後、光が収まると久沢の左手は紅く、甲には緑色の宝玉が埋め込まれた巨大な腕へと変化した。

ブーストテッド・ギアこれこそが二天龍の一角、赤龍帝ドライグが封印されている神滅具赤龍帝の籠手である。

これこそリアスが切り札にしている自分の兵士ポーン、現赤龍帝の久沢戒斗である。赤龍帝の籠手を所持する久沢のおかげで上層部に媚びを売れ、四魔王達への称賛を買えた事によりこの町を兄からもらえたのだ……しかも神滅具、これに勝てる存在が要るわけが無い……もし対等に戦える者がいるとすれば同じく二天龍の一角であるアルビオンを封印した神滅具、デイベイン・デイベイテイング白龍皇の翼を持つ現白龍皇だけだろう。

まさに勝利が約束された様なモノだ……リアスはそう確信し笑みを浮かべるが、朱乃と木場、小猫の三人だけはつねに警戒を怠らない様にしていた。何せ相手は多くのはぐれ悪魔や墮天使、契約悪魔を滅ぼしてきた集団の一人だ……いくら現赤龍帝の久沢でも自分達とは変わらない転生悪魔……もし敗北した場合は、逃走経路を確保しつついつでも逃げれる準備と臨戦態勢をとっていた。

「さてと、赤龍帝の力……とくと味あわせてやるよ!!」

『Boost! Boost! Boost!』

「……ッ!」

久沢はニヤリと笑うと赤龍帝の力……【能力倍加】を三回使って、身体能力を向上させた後に少女に向かって駆け出しパンチを放とうとする。

少女も勢いよく前方に飛び出し、刀を大剣に変形させ、向かってきた久沢に大剣を横風ぎに振るう。

「バカめ! そんなナマクラ剣で現赤龍帝であるこの俺が倒せるかよ!!」

勝つ気満々の久沢は左手の籠手を突き出してくる。籠手と大剣……いつ激突しても可笑しくない状況だが……

「はぁい、そこまで」

そこで思わぬ人物が現れたのは言うまでもない。

その人物は右足で少女の大剣を踏みつけ、左手の木刀で久沢の籠手を受け止めたのだ……それも一秒にも経たない速度で二人が対峙しようとした場所にわって入ったのだ。

「…………ツ!?!」

「て、てめえは!?!」

その場に居た少女や久沢、そしてリアス達は驚愕した。その男がまた自分達の前に現れた事を……………その男こそが……………

「よお……………」昨日振りか?それと……………初めて見たぜ?お前が驚く顔をよお」

憎たらしく笑う白夜叉……………坂田 銀時その人である。

あまりの出来事に困惑する久沢だが、我に返ると後ろに跳び銀時を視線を向けた。

「な、何でてめえが……………」そおおおりヤアアアアアツ!」なっ!?!……………ゴバアツ!?!」

「カ、カイ……キヤアアアツ!?」

何故ここに居るのかを聞こうとする久沢だが、いつの間にか赤髪の少女が前方に現れたと同時に掌から巨大な紅い結晶を取り出して両手に持つと、野球のバットイングみたく大降りなスウィングを久沢の腹部に食らわせる。もろに食らった久沢は勢いよく吹き飛ばされ後ろにいたリアス共々近くの木々に激突した。

そして、赤髪の少女は結晶を地面に突き刺して久沢とリアスが飛んでいった場所を遠くから見つめた後、楽しそうに銀時に語りかけた。

「ギン！ギン!!見たか？アタシのスウィングでアイツら向こうまでぶっ飛んだゾ♪」

「おおー！すげえなミカ、お前将来は立派な野球選手になれんじゃね？」

「なあギン。ヤキユウってモノはそんなに面白いノカ？」

「まあな、まずは野球のルールをだな……『ドガッ！』っと、そうこうしてるウチに……」

楽しそうに話しかける少女ーミカに、銀時は頭を撫でながら誉める。すると、少女は銀時の右足が踏みつけている大剣を力づくで持ち上げて退かすと同時に銀時目掛けて振り落とす……

ーガキンッ！

が、それは黄土色髪の執事服を纏った女性の持つ緑色の大剣によって受け止められた。

「銀時様、お怪我はありませんか？」

「フアラ！」

「すまねえなフアラ、助かったぜ……ガリイとレイアはどうした？」

「ご安心を二人は後程、こちらへ合流しますわ」

「そうかい」

執事服の女性ーフアラは銀時の無事を確認すると残りのメンバーの事を冷静に答えながら少女の大剣を受け止める。

ーピキピキ……

「ッ!？」

ーバキンッ!!

フアラが持つ剣の刀身に赤い術式が浮かび上がると、受け止めていた少女の大剣にヒビが入り……そしてバラバラに砕け散った。少女は銀時達との距離を離れ、逃亡の際に使用した黒い結晶を地面に投げ捨てる……が、一向に魔法陣が形成されない事に驚愕する。

「そんな地味な方法では、逃走は不可能だ」

「何せ……エルフナイン特製の結界が張られてるんだから、そおんな簡単に逃げられないわよお？」

声が出た方向へ振り向くと、そこにはカジノのディーラー服を着用した女性ーレイアとゴスロリ服を着た少女ーガリイの二名が木陰か

ら姿を現した。

二人が現れた事を確認した銀時は木刀を担いで少女の元まで歩み寄り、木刀を構えると同時に不敵な笑みをこぼした。

「さてと、これでこっちのメンバーは全員揃ったな？そんじや……………この前の決着と行こうじゃねえか？」

これが異世界で初めて銀時が戦う瞬間であり……………この世界の命運をかけた決戦の幕開けでもあった。

……………  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

謎の少女：水樹奈々

リアス・グレモリー：日笠陽子

久沢 戒斗：小野大輔

フアラ・スユーフ：田澤茉純

レイア・ダラーヒム：石上静香

ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

ミカ・ジャウカーン：井澤詩織

スーツの男：赤羽根健治



## 第陸話 白き夜叉と天翔る剣士②

それは銀時が少女と再会する数時間前のチフォージユ・シャトーにて……

――回想――

『聖遺物？何だそりゃ？』

キャロルが何処かへ出掛けた後、エルフナインの研究室に足を運び、件の少女が持っている不思議な能力を研究室室長のエルフナインと話し合っていた。

『聖遺物と言うのは、世界各地に伝わる神話や伝承に登場する超常の性能を秘めた武具の別称です。その聖遺物には魔を祓う効力が備わっていて……悪魔、堕天使、天使等の人外には天敵の部類に当たります』

『要するにだ……その聖遺物を使ってるのが例のガキの所属してる組織の【人外狩り】……って訳か？』

銀時の問いに、エルフナインは真剣な顔で頷いた後に机に置いてあるリモコンを取ると、幾つものモニターが現れる。モニターには件の少女の他に……六人の女性が映し出される。

『ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！』

『この映像はガリイが出現場所に行つて、集めてくれたデータです。見ての通り、モニターに映っている六人と銀時さんが戦った人と合わせて……七人居ます。ボクと姉さんはこの女性達を聖遺物の力を纏

う者……” シンフォギア” と呼んでいます』

『シンフォギア………』

『はい、銀時さんが戦った女性が纏っている聖遺物の名は【天羽ヶ斬】あめのはばきり……日本の伝承に言い伝えられる須佐乃男命すさのおのみことが八岐大蛇退治に使用した刀剣です……映像でご覧の通り、刀剣や斬撃等の近接戦に特化した聖遺物です』

『近接戦ねえ………んで、その対抗策は？』

『はい、胸についてあるペンダントを注目してください。これが力の源………動力源の役割をしています。これを直接攻撃で破壊すれば彼女の力を無力化する事ができます』

『ペンダント………相手の急所さえわかりやあどうつて事はねえな』

『でも油断しないでください、相手は聖遺物を武器に戦う相手ですから………いくら互角に戦える銀時さんでも今度は勝てるかどうか………』

『心配すんな、侍はこの程度じゃやられねえよ………ただ、目の前に塞がる奴をぶっ飛ばすだけだ。まあ、任せとけて………ちゃんと姉ちゃんの依頼はこなしてやつからよ』

銀時はニカツと笑いながらエルフナインの頭をポンポンと軽く叩きながら研究室を後にした。

――回想終了――

「設置した試作結界の成功を確認した。後は銀時が派手にターゲットを捕らえるだけだ」

『わかりました！みんな気をつけて……』

「地味な心配は無用だ……それじゃシャトーでまた」

レイアが通信でエルフナインに新作結界の成功報告を終えた後にガリイ、ミカ、ファラの三人と共にキメポーズをとりながら少女と銀時を囲む様に四箇所へと着いた。

「銀時、この前の決着をちやつちやつと終わらせなよ？私はこう言うクツソ面白くない事には本気出す気にもなれないんだから……」

「そう言ってる割にはガリイは楽しそうだゾ」

「うっさい！私はマスターの命令で仕方なくこいつの手伝いをしてるだけよ!!」

「まったく、頑張り屋さんなんだから……」

「やらない事だけやって、いざやろうとする事にはやらないあたりが性根の腐ったガリイらしいが……今回は派手にやる気らしいな」

ガリイの気まぐれな態度にファラは呆れて苦笑し、レイアは珍しいと呟きながら笑みをこぼす。すると、少女は新しい刀剣を取り出し構えると臨戦態勢に入った。かたや銀時も木刀を構えて少女と対峙する。

「ま、待ちなさい……!」

すると後方からミカに吹き飛ばされたりアスが眷属達と共に銀時達の前に現れる。

「またてめえかよ……こっちは今、工作中なんだけど？」

「そうはいかないわ！そいつは私達の獲物よ……関係の無い貴方達は早く立ち去りなさい!!」

「良く言うぜ、自分の治める土地一つ管理できねえガキが今頃になってお仕事始めますだ？その前にてめえ自身の管理をしやがれ……そんなんだから他の人外共がのさばったり、こいつみたいなのが出てくるんだよ。ガキはガキらしく家に帰って歯あ磨いておしっこして寝てろコノヤロー」

「か、下等な人間の分際で……悪魔がそんなに偉いのかよ?」……なっ!?!」

リアスの言葉を遮って銀時は口を開き続ける。

「俺にとっちゃ……人間も悪魔も堕天使も天使もおんなじもんだと思っうぜ?時には対立して、時には仲良くやって……時には意見が食い違って争う事もあんだろうよ、だから俺はこう思うんだよ。俺もてめえも同じ生きてるもん……変わらねえ存在だつてな?」

「私が……人間と……貴方と対等……?」

銀時の言葉にリアスは手を強く握り、憎悪を込め睨み銀時に怒鳴りつけた。

「ふざけないで!下等な人間と栄光ある私を……悪魔である私を一緒にしないで!!私達こそが!人間よりも!!堕天使よりも!!天使よりも

素晴らしき存在なのよ!？」

「ここまで言ってもわかんねえのか?」

「黙りなさい! 私を散々侮辱した事……悪魔に齒向かった事を後悔しなさい!!」

リアスは怒りに任せてグレモリーの能力である紅い波動【滅びの力】を銀時に向かつて放つ。だが、放った瞬間にファラが銀時達の前に踊り出ると持っている大剣を袈裟がたに振るう。そうする事で緑色の巨大な竜巻が発生し、波動と衝突するとその場で消滅した。

「そ、そんなっ!？」

「まったく……貴族である身分以前に自己中心的な立ち振舞い……礼儀作法がなつてませんね? それに、四魔王の一角……サーゼクス・ルシファアの妹でも滅びの波動の性質の低さ……思ってたよりシヨボいわね?」

「い、一度ならず二度までも……もう許さないわよ!! カイト! 朱乃! 祐斗! 小猫! 王であるこのリアス・グレモリーが命じる! あの愚か者達を殲滅しなさい!!」

滅びの魔力がかき消され、ファラに罵られたリアスは怒りのままに自身の眷属達に命令を下すと、眷属達は戦闘態勢に入る。すると先程まで傍観していたレイア、ガリイ、ミカの三人がファラの横へ立ち並ぶ。

「なあに、一人だけ抜け駆けしてんのよ?」

「あら？手伝ってくれるのガリイ？」

「別に……私はあるな天パーの勝負を見学するよりこつちの方が面白いと思っただけよ。それゆか、あの脳内お花畑のお嬢様に世の中の現実って奴を見せたいだけだしね？」

「珍しく同意見だなガリイ。ワタシもあの地味な女には一度、派手な仕置きが必要だと思っていた所だ」

「アタシはみんなで暴ればそれでいいゾ！」

ガリイが、レイアが、ミカが思い思いの考え述べ、それを聞いたファラは呆れながら苦笑する。

「まったく……みんな本当に自分勝手なんだから……銀時様、グレモリー達は私達にお任せください」

「銀時、そちらはド派手に頼むぞ？」

「やられんじゃねえぞ？天パー侍！」

「けっ……んなことあ、わーってるよ！」

「ニヒヒツ！全員ぶっ飛ばしてやるゾ!!」

銀時やファラ達が、それぞれの相手へと目を向ける。リアスは自分達が勝てると思ひ込み、笑みを浮かべながら相手であるファラ達に言い放つ。

「悪魔である私達に勝てると思っているの？あの男や貴女達も何処まで愚かなのかしらね？」

「ああら？負け犬の遠吠えなセリフ……まさに脳内お花畑……ちやんちやらバカですねえ♪なら、ガリイの相手はアンタで決まりね？」

「さつきから黙って言わせておけば……！朱乃！一緒にあの無礼なゴスロリをやるわよ!!悪魔に逆らった罪……万死に値するわ!!」

「わかりましたわ……（あらあら、相変わらずガリイ様は他人を煽るのが上手な事♪）」

「やれるモンなら………やってみな！」

【ガリイ・トゥーマーン VS リアス・グレモリー & 姫島 朱乃】

「貴様が現赤龍帝………思ってたより地味だな？」

「んだと!?俺こそが現赤龍帝で、リアス部長眷属のNo.1の実力を持った超新星だ!てめえの様なモブが俺に勝てるわけねえんだよ!!俺の力の前にひれ伏しやがれ!!!」

「ワタシに地味は似合わない………そして、貴様には赤龍帝の称号も地味に似合わない………見せてやろう、ワタシが見せるド派手な戦いを!!」

【レイア・ダラーヒム VS 久沢 戒斗】

「あら？その剣は神器ですわね……名は確か……魔剣創造。ソード・パースで合ってるかしら？」

「よくご存知で……」

「ええ、神器に関する書物で少々お見かけしましてね？あらゆる属性の魔剣を創造できる剣……一度お手合わせしたいと思っていましたが……まさか、この様な形であいまみえるとは……」

「それはどうも……貴女の持つ剣も普通の剣じゃありませんね？その剣から発する強い何かを直に感じますが……それも神器で？」

「そう、私の剣は普通の剣にあらず……そして神器でもあらず……あらゆる剣を殺す哲学兵装、ソードブレイカー剣殺し……これこそが私の剣です」

「剣を殺す……剣殺し……確かにただモノじゃありませんね……」

「では参りましょうか？グレモリーの騎士ナイトさん？」

「グレモリー眷属の騎士！木場 祐斗!!貴女の申し出、慎んでお受けしよう!!」

「フフツ……キャロル・マールス・ディーンハイム及び、坂田銀時に仕える【終末の四騎士】ファラ・スユーフ…Dance Macabre！」

【ファラ・スユーフ VS 木場 祐斗】



「アタシの相手はお前か？」

「……そうですね、貴女に怨みはありませんが……倒させてもらいます」

「ニヒヒ、アタシは今とっても嬉しいゾ!!」

「……嬉しい？」

「アタシ、生まれた時から一度も外に出てきた事無くて……でも、初めて外でガリイやギン達と一緒に出てきて……こうして暴れる事ができてとっても、とっても、とっくくても!!嬉しいんだゾ!!」

「……そうですか、なら私も全力で貴女の相手をするまでです!」

「ジャリンコ、アタシは強いゾ？」

「……ジャリンコじゃありません…塔城 小猫、それが私の名前です」

「コネコか……わかったゾ!アタシの名前はミカ・ジャウカーン、そんなじゃ!勝負だゾ!!」

【ミカ・ジャウカーン VS 塔城 小猫】

フアラ達がリアス達の相手をする事となり、銀時は再び少女と目を合わせる。すると少女は新しい刀剣を取り出して、二刀流で銀時に斬りかかる。銀時は木刀で少女の二刀を捌き、隙ができた所を見逃さずに縦風ぎで一気に振り落とすも、二刀の刀剣で防がれる。

「やっば、一筋縄じゃ……行かねえな!!」

銀時は木刀を持ったまま、少女が持つ2つの剣目掛けて強烈な蹴りを入れて弾き飛ばした後、後退して木刀を構え直す。

少女も高く跳躍し、弾き飛ばされた二刀を掴み着地と共に構え直した。

「女相手だとやりにくいが……しやあねえな、こっからは瞬き厳禁だぜ？」

そう言った後、銀時が放ついつもの雰囲気ガラツと変わる……死んだ魚の様な目は赤く煌めいた眼光に豹変し、ただならぬ殺気を迸る。

これがかつて敵味方が恐れた銀時……攘夷志士最強と謳われた白夜叉の姿である。

そしてゆっくりと木刀を肩に担いだ後、一気に少女に向かって構えた。

「白夜叉……坂田 銀時、参る!!」

その言葉を皮切りに、銀時は少女に向かって駆け出した。

キャスト

坂田 銀時：杉田智和

謎の少女：水樹奈々

リアス・グレモリー：日笠陽子

久沢 戒斗：小野大輔

姫島 朱乃：伊藤静

木場 祐斗：野島健児

塔城 小猫：竹達彩奈

エルフナイン・マールス・デインハイム：久野美咲

フアラ・スユーフ：田澤茉純

レイア・ダラーヒム：石上静香

ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

ミカ・ジャウカーン：井澤詩織

## 第漆話 白き夜叉と天翔る劍士③

「おらあつ!!」

銀時は一気に少女との距離を詰めた後、木刀を両手に持って勢いよく上段から降り下ろした。少女は再び二刀で受け止めようとすも、本気状態の銀時が放つ一撃の重みに耐えきれずに左膝をつく。

その隙を見逃さず、銀時は木刀を右手に持ちかえて少女が持つ片方の刀剣を弾いた後に脇腹に重い蹴りを食らわせる。

もろに受けた少女は勢いよく吹き飛んだ後、態勢を立て直すも銀時はそれを許さず、一気に少女との距離を詰めて木刀による連続斬りを少女に浴びせる。

少女は必死に銀時が放つ斬撃を刀で捌き、捌ききれない攻撃は避けると言う防御を繰り返す。だが、次第に刀剣にヒビが入り……そして

「ておりやああつ!!」

ーバキンッ!

銀時の振るう横一閃で刀剣は真つ二つに折れる。少女は折れた刀剣を捨て、銀時の前でしゃがむと逆立ちとなった状態で開脚した後に回転しながら銀時に鋭くなった足の刃で斬りつける。

《逆羅刹》

「同じ手が……二度通じるかよ!!」

銀時は一時後退した後、ギリギリまで身を屈ませながら勢いよく少女に向かって駆け出した後に、重い横風ぎを無防備な少女の腹部に食らわせて吹き飛ばす。

重い一撃を浴びた少女は、凄まじい速さで飛ばされながら木々を貫通しその場で地に伏した。

銀時は木刀を担ぎながら、ゆっくりと少女が飛ばされた場所へと歩み寄る。

すると、伏していた少女はフラフラと立ち上がり、新たな刀剣を取り出して構える。

「もう、止めとけ………これ以上やっても………てめえに何の得がある？あるのは戦い続け、身を滅ぼす虚しさだけだ………」

銀時は冷たく言い放つも、少女は銀時の言葉を構わずに刀剣を上空に打ち上げると同時に飛び上がる。すると刀剣は巨大な剣へと変形し、それに合わせて少女は銀時に目掛けて巨大剣を蹴り出す。

### 《天ノ逆鱗》

巨大剣が銀時が居る地上に目掛けて落下し、粉塵と共に突き刺さる。そして少女は追い討ちとばかりに空中へと大量の剣を具現化させると、一気に銀時の居る地上目掛けて大量の剣を落下させる。

### 《千ノ落涙》

剣の雨が地上に降り注いだ後、少女は地上へと着地して粉塵が舞う辺りを見渡して銀時の姿を搜索する。

「……………」

これだけの攻撃を受けて無事な者はいないと悟ったのか、少女はその場を立ち去ろうとする……。が、刹那に何か殺気を感じ刀剣を取り出して後方を斬り裂くも……。空を斬っただけだった。

少女は気のせいだと思いながら、前を振り向くとそこには白い着物に所々切りつけた後が残り……。顔や腕、黒い服から少量の血を流し……。夜叉の顔で少女を見つめた銀時が木刀を上段の構えにしながらくんいでいた。

「残念だったな……。侍はこの程度じゃやらねえんだよ。デケエ剣が襲ってこようと、剣の矢を浴びようとも……。テメーの魂が折れねー限り、何度でも立ち上がる……。それが！侍って奴だあああああああああああああああ！！！！！！」

少女は直ぐ様、刀剣を横へと構えて防御をしようとするも銀時はそれを許さずに怒号と共に少女へ……。そして少女の胸につけてあるペンドラントもろとも重い上段斬りを食らわせた。

ーピキ……。ピキピキピキ、パリンツ！

銀時の一撃で徐々にヒビができ、ガラス細工の様に粉々に砕け散った。そしてペンドラントが壊れた事により、少女の服は消滅し一糸纏わぬ生まれた姿になった後、少女は糸が切れた様にバタリと地面に横たわった。

銀時は木刀を投げ捨てて、自分の纏っている白い着物を脱いだ後に少女を包ませて……そのまま抱き抱える。

「つたく……とんでもねえ依頼を引き受けたモンだな……」

銀時は苦笑し、愚痴をこぼしながらも投げ捨てた木刀を腰に挿してペンダントの破片を拾い……エルフナインからもらった転移結晶を地面に投げ、自分の周りに転移陣を形成させる。銀時は少女を抱き抱えたまま、フアラ達の安否を願いながらもその場から姿を消した。

――  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

謎の少女：水樹奈々

## 第捌話 終末の四騎士・蒼き聖杯

ガリイ side

私は造られた時から性根が腐っていると、マスターや皆に言われてきた……

だって、人の嫌な事を煽って逆上した反応を見るのは最高に面白い事じゃない？

だからわざとらしく可愛娘ぶったり、きつく言ったりもするのよ。そうしないと……誰も構ってくれないじゃん。

私の態度に呆れる反応をしたり、任務を終えた後に言葉をくれるマスター。

マスターの弟なのにいつもオドオドしてて……からかい甲斐のあるエルフナイン。

リーダーぶっててもしっかりしてるファラ。

派手とか地味に拘るレイア。



いつつも私にうっとおしく、子犬の様にじやれついてくるミカ。

マスターの片思いの相手であるアザゼル。

時々遊びに来る半端墮天使の朱乃。

そして、異世界から来た天パー侍の銀時……

こんな私でも……皆は私を怒ったり、構ってくれた……うっとおし  
いと思うけど、ちよつとだけ嬉しいと思えた。

でも、私は性根が腐ったままでいさせてもらう。

けどね、これだけは言わせてもらおうよ………

皆、私に構ってくれてありがとう。

side out

ー ガリイ VS リアス & 朱乃 ー

ガリイは凍らせた地面を滑りながら自らの相手……リアスと朱乃に対して憎たらしい笑みで見つめる。

一方のリアスは滅びの魔力を、朱乃は雷撃をそれぞれ放つもガリイはそれを鮮やかに……そして嘲笑うかの様にかわしながら、相手（特にリアス）の苛つく反応を楽しんでいた。

「ほらほらあつ！私に悪魔の恐ろしさを味あわせるんじゃないやなかったのかしらあ!?!いい加減に一発くらい当ててくれないといたぶりがいが無いのよねえ？」

「この……調子に乗るな!!」

リアスはガリイの簡易な挑発に憤慨し、滅びの波動を放つ……だが、ガリイは蒼い障壁を張って波動を無効化させた。

またか……リアスは自分の攻撃を防がれた事に静かに舌打ちし、前より強力な滅びの波動を放つが……ガリイはニヤリと嘲笑し、再び地面を優雅に滑べりながら避ける。

リアスはガリイの態度に腹を立てて募る苛立ちが収まらずに波動を公園全体に放ち始めると、朱乃が雷撃を止めてリアスに声をかける。

「リアス！これ以上辺りに魔力を撃ち続ければ他の皆に……」

「私に意見しないで！朱乃、貴女は私の眷属の女王なのよ!?王である私の命令は絶対……貴女には意見する権利は無いわ！貴女はただ私の指示だけを聞いていれば良いのよ!」

「で、ですがもし祐斗君達に当たったら元も子もありませんわ!」

「裕斗は騎士よ？自慢の俊足でかわせば問題無いし、小猫は戦車ルークだからこの程度で死なないわ、そしてカイトは現赤龍帝よ？私の眷属ならそんな簡単に殺られない事ぐらいわかるはずよ!?そんな暇があったら、早くあの娘への攻撃をなさい!!私の命令は絶対、良いわね?」

リアスの自分勝手な判断に言葉が出ない朱乃……仲間なら避けて当然、まるで道具の様な……奴隷の様な言い方にガリイは内心リアスに腹を立てた。

ガリイ達自動人形は、マスター主であるキャロルの手によって生み出された生きる人形……用が無くなれば廃棄される事もある程度考えていた。しかし、主は……キャロルだけは自分達をエルフナイン同様家族として接してくれた。生意気な態度をとっても怒ってくれるし、仕事を終えれば『ご苦労』と一言を言ってくれた……まさに自分達が仕えるにふさわしい主だ。そんなキャロルの願いを叶える事も自分達の存在意義に等しい。

だから仲間を……自分の部下である眷属達を道具の様な言動を取ったリアスに不快感を抱いたのだ。

ガリイは地面への滑走を止め、リアス達の元まで歩み寄る。

「聞き捨てならないわね……さっきの言葉?」

「あら?もう逃げるのを……黙りな!」……!」

「私を狙って撃つたんならまだ良いよ？ だけどさあ……その巫女娘の言った通り、そんなにバンバンバンバン辺りに魔力を撃ちまくったら、戦ってる仲間に当たるのは当然だと私は思うわね？……もし本当に仲間に当たったとしたら、てめえは責任取れるのかよ？ グレモリー家の次期当主!!」

「貴女の戯れ言なんて知らないわね？ あの子達は栄光ある私の眷属よ？ 私の為に死ぬるなら本望だと思っけど？」

「あんた……本気で言ってるの？」

「だったら……どうしたのよ!!」

リアスの言動にガリイは青筋をたてて睨むも、リアスは好機と察し無防備なガリイに魔力を放つとその場で爆発が起きて粉塵が舞い散る。

リアスは笑いながら、命中した場所に向かって喜びの歓声をあげた。

「どう？これが私の力よ！私を小物扱いさえしなければ、こんな報いを受けずに済んだモ……」

勝った……そう感じた次の瞬間、ガリイは無傷で勢いよく滑走しリアスの頬目掛けて強烈なパンチを放った。

「ブゲツ!？」

リアスは奇声を漏らしながら、後方の木々に激突し、うつ伏せで倒れた。

ガリイはポケットからハンカチを取り出すと、リアスを殴った手を拭いた後に憎たらしい笑みを浮かべながらリアスの元へ向かい、彼女の目の前でしゃがむ。

「どお？倒した！殺した！ざまあみろ！……と思った希望をここでバツサリと踏みにじるのがとくつても面白いのよねえ♪」

「こ、このお……っ！あ、朱乃！何をポケットとしているの!?早く私を助けなさい!!王の命令よ!!」

「……………」

「朱乃！聞こえないの!?早くコイツを殺しなさい!!!」

「わかりました……………」

「あ?」

朱乃は悪魔の翼を広げ、上空へと飛び立つと雷雲を集め始めた。ガリイが上空に視線を向けた後、リアスは這いつくばって逃げようとするもガリイはそれを見逃さずに彼女の背中を踏みつけた。

「ガツ!?そ、その足を退けなさい!!私を巻き添えにする気!?!」

「ああ、そうだよ……仲間の落雷を食らえるなんて滅多に無い体験でしょ?だったら仲良く食らった方が平等だと思うけどね?」

ガリイは悶えるリアスにそう言いながら、足に力を入れ続け……逃げられない様にする。

朱乃の雷の魔力は、自分が放つ滅びの魔力と同等……もし、まともに食らえば黒焦げになるのは必須……リアスは戦慄し、上空で雷を放

とうとする朱乃へ必死に呼び掛けた。

「ま、待って朱乃!? 私はまだ……」

「落ちよ……落雷!!」

「アアアアアアアアツ!!!」

リアスの必死の叫びも虚しく、朱乃は魔力で呼び寄せた雷雲から落雷をガリイに目掛けて放った。

落雷はまるで導かれる様に、ガリイへと命中する。かたや踏みつけられているリアスもそれ同様に落雷のダメージを受けながら苦痛の叫びを公園内へと響き渡らせる。

そして、落雷が落ちた場所には……黒焦げになっているガリイとリアスが転がっていた。

すると、リアスは必死に立ち上がろうとするもダメージが大きく起き上がれずに呻いていた。

「ぐっ……うううっ!!!」

「あらあら、ご無事でしたか?」

「あ……朱……乃っ!!」

「あれま、まだ気を失ってないなんてね? どんだけ頑丈なんだか……」

「は……? な、何で!? どうして……!」

リアスは意識が朦朧とするなかで、悪びれも無くやって来た朱乃と自分と同様に雷を食らっていたはずのガリイが無傷の状態で目の前

に現れた。

リアスはいまだに目を疑いながら、倒れているもう一人のガリイへと視線を向ける。

すると、倒れていた方は徐々に揺らめいていくと水となって地面に染み込んでいった。

「一緒に殺られて同士討ちを狙おうと思ったけどお……ザクンネン♪ あれは水に写った幻よ？あの時……あなたの魔力を食らった後に分身を作っておいたの☆……どう？仲間の雷にやられたご感想は!?」

「あ、朱乃！まさか貴女……!」

「うふふ……何を言ってるんですか？あの時、私に攻撃を命令したのはリアス……貴女なんですよ？私に非難の目を向けても貴女の自業自得ですけど？」

「そおんなに汚れちゃってえ……すぐにガリイちゃんがキレイキレイにしてあげる☆」

ガリイは嘲笑いながら上空に魔法陣を形成させると、そこから巨大な水の玉を作り出して一気にリアスへと放水する。

「キャ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ?!?!」

強力な水流に押し流されたりアスは、勢いよく近くの湖へと着水する。

そして、ガリイは追い討ちとばかりに魔法陣を目の前まで来させるところから猛烈な吹雪を噴射しリアスが着水した湖を凍らせる……すると、湖から彼女の左腕が出てくるも……数秒も経たずに氷塊へと姿を変えた。

「悪魔の氷漬け、一丁あがりつと……ああ〜！疲れたあ〜」

「うふふ……お疲れ様でした」

「はい、どうもって……朱乃、さっきのマジで焦ったんだけど……演技でも雷撃の威力は本気過ぎんでしょうが？」

「いえいえ、今まで溜め込んだモノをそのままお返したままですわ♪おかげで気分爽快で楽になりました……ガリイ様もそう思えませんか？」

「てめえのストレス解消なんざ知らねえよ……『ガリイ、聞こえますか？』ん？」

ガリイは、突如入ってきたエルフナインからの通信に耳を傾ける。内容は銀時が勝利し、気を失った少女を連れてシャトーへ帰還した……との事だった。

「へえ……意外にやるじゃん天パー侍」

「いかなさされましたか？」

「ああ、こつちの話よ……そんなじゃ、後の事は頼んだわよ？」

「ええ、お任せを……」

ガリイは朱乃に事の後始末を任せると、転移結晶を使ってシャトーへと帰還した。



キヤスト

リアス・グレモリー：日笠陽子

姫島 朱乃：伊藤静

エルフナイン・マールス・デイーンハイム：久野美咲

ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

## 第玖話 終末の四騎士・山吹の硬貨

レイア side

派手や地味の違いを見極めるには、相手の容姿やその思考ではつきりわかる。

ワタシは派手な行動や任務、自分の戦闘スタイルには自信はあるが……地味な役目や戦闘は嫌う主義だ。

マスターに仕える一人として……ワタシは派手さを必要に求める、今も派手な自分を保ちたいと思っている。

力を求めなければ、マスターや仲間……みんな……そして、可愛い妹を守れない。

………それこそ、ワタシが嫌いな地味に等しい行いだ。

だからワタシは派手さに拘り続ける………大切なモノを守るため力を、仲間を守る力を……

そして、ワタシとは別に違う方法で生まれた妹を守る力を……

何も守れず、ただ嘆く地味な行為をすることこそ……派手なワタシに合わない。

s i d e o u t

ー レイア VS 戒斗 ー

レイアはコインで錬成したトンファーを装備し、赤龍帝の籠手を持つ久沢を接近戦で圧倒していた。

いくら赤龍帝の倍加がかかった攻撃であろうと、当たらなければ意味が無く……レイアは久沢の攻撃をいなしながら、トンファーで顔、腕、脚等に強烈なカウンターを与えていく。

幾度と無くカウンターを受けた事で、久沢の身体はボロボロとなり……立っているのもやつの状態だった。

「どうした現赤龍帝、身体が地味に震えてるぞ？」

「うる……せえっ！」

久沢は激昂し籠手で殴りかかるも、レイアはそれをかわし顎目掛けてサマーソルトキックを食らわせる。

「ガッ!?」

「そんな地味な戦法では、ワタシには到底及ばない:!!」

レイアはトンファーへの錬成を解いてコインに還元すると、久沢に狙いを定めてコインをマシンガンで放つ弾丸の様に勢いよく久沢へ次々と投擲する。

「ガッ……!」

久沢はレイアが放つコインの連射を全弾食らい、フラフラとよろめきながら両膝をついて地面に両手をつけた。

「どうだ?ワタシの派手さは……現赤龍帝ならこれくらい派手な戦いに期待していたのだがな……やはり地味だったか」

「さつきから俺の事を地味地味地味地味言いやがってえ……!!おい、ドライブ!!もっと力を……アイツをぶち殺す力を寄越せ!!!」

『Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!』

久沢はフラフラと立ち上がりながら赤龍帝の籠手を強く掴みながら怒鳴る、すると籠手の宝玉が強く光輝くと久沢の力が倍加される。

「アハハハハハハハハハハハッ!!そうだ……!それで良いぞドライブ!!これが超新星……現赤龍帝であるに俺にふさわしい力だ!!これでお前をぶち殺せる程の強さになったぜ!」

「そうか」

「ならとつとと……」「それなら……」はっ？ブガツ!？」

久沢が勝ち誇った態度をしている間に、レイアはその近くまで接近し、錬成させたトンファーを久沢の鳩尾へとめり込ませる。

近距離からの打撃を食らった久沢は、腹部を抑えながら後退る。

「その隙を狙えば良いだけの話だ」

「アツ……アグツ…………！」

『Burst!』

籠手からの音声が流れると久沢の倍加は解除され、久沢は腹部に伝わる激痛のあまり両膝をついた。

「これ以上貴様に構っていても地味に時間を無駄にするだけだ。ここは一気に……苛烈に……そして、派手に仕留めてやる…………！」

レイアはそう告げた後、後方へ一気に下がると両手に持った大量のコインを久沢の周りへばらまく。

すると、金色の鉱石が地面から勢いよく出現すると久沢に直撃し上へ昇らせる。

「プギヤツ!?!」

「派手に散れ!!」

レイアは高く上空へ舞い上がり、上へ昇った久沢の腹部に浴びせ蹴

りを食らわせ……地面へ一気に蹴り落とした。

「ウアアアアアアアアッ!!」

上空から地面へ叩き落とされた久沢は粉塵が大量に舞い散ると共に断末魔を響き渡らせる。レイアは軽やかに着地をし、久沢の元へ近寄る。

そこでレイアが目にしたのは、地面に這いつくばる様に埋もれながら痙攣をし、白目をむいて気絶した久沢だった。

「どうだ？現赤龍帝。ワタシのド派手な戦いは？……と言っても気絶しては話かけても地味に無駄か」

『いや、コイツにとっては良いクスリになった……感謝する』

「ん？」

『すまん、こつちだ』

レイアは久沢の赤龍帝の籠手から発する音声に耳を傾けると、音声と共に宝玉が光輝いているのが目に写った。

「その声……ウエルンユードラゴン赤き龍の帝王ドライグですね？貴方のド派手な伝説はマスターからお聞きしております。貴方ともあろうド派手な御方が……この様な地味な男の神器になっているとは……」

『まあな……こんな奴に俺の力をくれてやるのも屈辱だが……神器に封印されては抵抗は出来ん……そして、俺を封印した悪魔に協力している有り様だ。俺も墮ちる所まで墮ちた……これじゃあ、アルビオンに合わせる顔が無い』



「そうか……妹には、すぐに帰ると地味に伝えてくれ」

『わかりました』

『オイオイッ!?無視すん……』

通信越しから聞こえる銀時の怒鳴り声をレイアはあえて無視し、通信を切ると久沢の服の首襟を掴むとドライグがふと尋ねてきた。

『盗み聞きは趣味じゃないんだが……妹が要たのか?』

「ええ、ワタシとは別に豊かで恵まれた妹でして……少々派手すぎる行動が多いのですが……守りたいと思える妹なんです」

『そうか……』

「さっ、地味な会話はここまでにして……派手に早く向かいましょう……」

レイアは笑いながら、未だ戦っているミカと小猫の元へとドライグと気絶している久沢を連れて向かった。

—————  
キヤスト

坂田 銀時：杉田智和

久沢 戒斗：小野大輔



赤龍帝：立木文彦

エルフナイン・マールス・デインハイム：久野美咲  
レイア・ダラーヒム：石上静香

## 第拾話 終末の四騎士・翠緑の剣

フアラスィデ

目が覚めると……そこには、一人の男性と二人の姉弟が居た……

この人が私を造った親……マスターでその二人がマスターの子供なのかしら？

三人は人間……私は動く人形……ならば人形らしくマスターの命令に従うのが本望……そう思ってきた……

マスターは私に名を与え、二人のお守りを任せられた。

私はキャロル様、エルフナイン様と常に一緒に行動を共にし……そして一緒に遊んだりもした。

その時に、人形である私に……楽しいという感情が芽生えたのかも  
しれない……

人形に感情など必要ない……でも、消してしまったら……私はどう  
なってしまうの……？そう悩んでいた。

私はマスターにこの事を相談した……感情を持った人形は壊れれば良い……そう告げたら……

マスターに頬をぶたれた。

そして怒りながら、泣きながら抱いてくれた。

『二度とそんな事を言ってはダメだ!!君は私とキャロル、エルフナインの大事な家族なんだ……!!だから……もう、そんな事を言わないでくれ……頼む……!』

そしたら……何かが頬につたるのを感じた……そして、次々と目から溢れでて……そして、何かが沸き上がってくるのを感じた……これが悲しいという感情だとすぐにわかり……気がつけば私はマスターを抱きしめて泣きながら謝っていた。

『ゴメンなさい……ゴメンなさい……!』

何度も何度もマスターに泣きながら謝り続けた。涙が枯れるまで何度も……

そして、マスターがご病気で亡くなられた後……私はキャロル様を新たなマスターとして仕える事になった。

マスターはレイア、ガリイ、ミカの三人をエルフナイン様と一緒に完成させ、私に彼女達の世話係を任された。

最初はギクシヤクした関係だったけど、三人の性格を深く知り……そして今では四人でマスターに仕える【終末の四騎士】を結成し、エルフナイン様と共に初代マスターの理想を叶えるため……そして、マスター自身が目指す『三大勢力の和解、人間と人外が平和に共存する世界』を実現させるために私は剣を振るい、マスターを支え続ける。

この、哲学の牙の名の元に……

s i d e o u t

ー ー  
フアラ VS 木場 ー ー

木場は”魔剣創造”の能力で幾本もの魔剣を自身の場へ造りだした後、騎士の力を使ってフアラの周りを縦横無尽に走り回りながら斬

りつける。だが、ファアラはフラメンコを彷彿させる振る舞いでかわしたり、自らの哲学兵装“剣殺し”で斬撃を捌いたりと木場の攻撃を受け続けた後、つば迫り合いへと持ち込んだ。

「さすがは魔剣創造の使い手……剣の腕といい、駒の力を十分使いこなしているとなると……騎士の名は伊達ではありませんわね？」

「そういう貴女もお強いですね……貴女のような剣士とこんな形で戦う事になってしまったのは残念ですが……僕にも負けられない理由があるんです！」

「そうですか……では、私も【終末の四騎士】リーダーの誇りにかけて、全力で貴方を倒させてもらいます！」

ファアラは剣殺しを袈裟がたへ尻ぎはらって木場の魔剣を弾いた後、剣殺しから緑の衝撃波を木場に目掛けて放つ。

木場は騎士の力で衝撃波を避けて一気に間合いへと入ろうとするも、ファアラは先ほどリアスの魔力を打ち払った竜巻を向かってくる木場の目の前で発生させた。

「くっ！」

木場は一旦停止し、騎士の力で後退するが……ファアラは突きの構えで飛び込むと、竜巻を貫通し一気に木場へ突き刺そうとする。

だが木場は紙一重でそれを避けた後、先ほど魔剣創造の能力で幾本も地面に出現させた魔剣の一本を引き抜いて二刀流にしファアラへと剣先を向ける。

「では、こちらも……」

ファアラは剣殺しを何処からか取りだして二刀流で木場へと斬りか

かる。二本の魔剣と二本の剣殺しが互いにぶつかり合い、激しい剣技は幾度となく続いた。

ファアラは一旦距離を離し、二本の剣殺しで先ほどより強力な竜巻を発生させる。

しかし木場は、先ほど抜いた魔剣を竜巻へ向けて斬りつけると竜巻は一瞬にして消え去った。

ファアラは竜巻が消え去ったのを直視するが、何事にも動じずに木場へと声をかけた。

「私の風を消し去るなんて……もしかしてそのお持ちになられている魔剣のお力で？」

「ご明察、これは風リプレッションカーム 凧 剣と呼ばれる魔剣で風を鎮める事が出来ます。貴女の攻撃パターンはその剣による斬撃と風を操る力の2つ……だからこの魔剣が効率が良いと判断しました」

「相手の攻撃パターンを読み取り、相性が良い魔剣を使いこなす。やはり、貴方は興味深い……あの小娘の眷属にはもったいありませんわね？」

「お世辞としてもらっておきます、ソード・パース 魔剣創造ッ！」

木場は二本の魔剣を地面へ突き刺すと、そこから幾本の魔剣の束がファアラへと襲いかかる。

だが、ファアラは微笑みながら二本の剣殺しを構える。

「ですが……その神器が剣である事には変わりはありません。そして、私には手ほどの傷すら負わせることは叶わない……」

ファアラは二本の剣殺しから先ほどより強力な緑の衝撃波を放つ。

すると、向かってきた幾本の魔剣は衝撃波に衝突すると同時に一瞬にして砕け散った。

「なっ!?!」

「余所見はいけませんよ?」

木場は魔剣が砕け散った事に驚愕するもフアラはその隙を見逃さず一気に距離を縮め、剣殺しを上段へと振り落とすと木場は即座に魔剣創造と風凧剣で防ぐ。

すると、剣殺しの刀身に赤い術式が浮かび上がると同時に魔剣創造と風凧剣にヒビが入りバラバラに砕け散った。

「ッ!?!」

「Mark the End of!」

「グアアアアアッ!!」

フアラは剣殺しから強烈な竜巻を発生させ、いまだに動揺している木場を上空へと吹き飛ばした。

竜巻が消滅すると木場は上空から地面へと墜落し、墜落した場所にはクレーターができていた。

「グッ!?!……ウウツ!?!……!!」

木場はいまだに気絶しておらず、苦しい顔をしながらも傷ついた身体で起き上がろうとする。そこへやって来たフアラは剣殺しを倒れている木場の喉元へと突きつけた。

「まだ続けますか?」

「……いえ……僕の負けです……死ぬ覚悟はできてます……さっ、止めを……」

「いえ、私には貴方を殺す理由はありませんわ。私は銀時様達と仕事で此処に來ただけで、勝負を仕掛けて來たのは貴方達です」

「だったら……貴方には迷いがある」……ツ!？」

木場はフアラから迷いがあると指摘され、目を丸くする。

「貴方の劍には、仕える主に対する不満……自分の劍と力を主の為に使つて良いのか、それにふさわしいかの困惑……そして、御友人の為にも負けられないという信念……それが感じられました。ですから、貴方は死んではいけない……貴方が居なくなればそれを悲しむ人も現れます」

「……」

「とある人が言つておりました……自分の武士道<sup>ル</sup>を掲げ、それを貫き通し……自分が思う生き方、仲間を護る意思を魂に刻みこめ……と、要は大切な物を護る為に己を磨き……そして強くなる事だと思いません。貴方はまだ若い……そしてこれから強くなれます。だから……生き続けてください」

「……僕も……できるでしょうか？その人と……同じ事が……」

「できる、できないは貴方次第です。そして自ら選んだ選択を後悔しない事……私が言えるのはそれくらいでしょうかね？」

フアラはにこやかに微笑むの視認した木場は、苦笑しながら遠退く



意識の中で必死に口を開く。

「敵である……僕の心配を……してくれるなんて…可笑しな人だ……もし、また機会があれば……お手合わせ願えますか？……今度は敵同士では無く……一人の剣士として……」

「ええ、その時はお手柔らかに……」

「あり……が……と……う」

その言葉を最後に木場は気を失った。ファアラは倒れている木場を抱き抱えると、近くにあった木の根元へゆつくりと寝かせる。

『ファアラ、聞こえますか？』

すると、エルフナインからの通信が入ると耳を傾けた。内容は銀時が勝利し、気を失った少女を連れてシャトーへと帰還した……との事だった。

「畏まりました……こちらも今、終わりましたのでこれより帰還いたしますわ」

『はい、こっちはガリイが今、帰還して……レイアが少し用事ができて遅れると聞きました。ミカはいまだに繋がらなくて……』

「その時はレイアに任せたらどうでしょうか？彼女ならミカと一緒に帰還すると思いますので」

『そうですね、ではまた後で……』

そう言って通信を切り、転移結晶を使ってシャトーへ帰還するも

……最後に自分の相手である木場へ視線を向けながら、ファアラはその場から消えた。

—————  
キャスト

木場 祐斗：野島健児

エルフナイン・マールス・デインハイム：久野美咲  
ファアラ・スユーフ：田澤茉純

イザーク・マールス・デインハイム：遠藤孝一

## 第拾壹話 終末の四騎士・紅き杖

ミカside

アタシは造られた頃からシャトーに居た。外の世界へ遊びにいきたいと思っただんだゾ……………

でも……………いつも外へ行くのはマスターとエル、ガリイとフアラ、そしてレイアだけだった。

マスターは……………アタシは戦闘特化の自動人形で力の制御がコントロールできないから、外へは出せないと言ってた。

一度でも良い……………アタシも外でマスターやエル達と一緒に遊びたいし、暴れたいと思っただ……………でも、そんな機会は無かったんだゾ。

アタシはみんなの事が好きだゾ。でも、もしかしたらみんなの事を傷つけちゃうかも知れないから、アタシはミュンツェとおとなしく遊んでいたんだゾ。

アタシが外に出なければ……………みんなの迷惑にならないし、もし帰って来たら思いっきり甘えれば良い……………そう思っていた。

でも、そんな時にギンがやって来た。ギンはサムライで、色んな事

を知ってた……難しい点はわからないけど、アタシにわかりやすく教えてくれた。

そして、ガリイ達と一緒に外へ出かけないかと聞かれた……とても嬉しかったし、行きたかった。

でも……アタシが行って、もしギン達の邪魔をしたらどうしようと思ってしまう。でも、ギンはそんな事を気にせず……不意に手を差しのべてくれた。

『なに暗い顔してんだよ？お前だって、俺等と一緒に行きたいんじゃないねえのか？』

『え？……それは……その……』

『だったら自分がやりたい事をやりやあいんだよ、どうやろうとお前が思う選択をしてやってみろ……ミカ』

『……アタシが思う……選択？』

ギンにそう言われて……アタシはギンの手をゆっくりと重ねて、今まで思い心の奥底にしまっていた事を吐き出してみた。

『……アタシも、アタシもギン達と一緒に行きたい！だから、アタシも外の世界へ連れてって欲しいんだゾ!!』

そう言ったら、ギンはニカツと笑いながらアタシの頭を優しく撫でてくれた。

『よく言えたな……そんじや行くか?』

『うん!』

アタシは造られた頃から外の世界へ行つた事が無かつた……でも、今は違う。

ギンがアタシを、ガリイ達と一緒に外へと連れていってくれた。だから、アタシはギンやみんなの為にこの力を使って暴れまくってやるんだゾ!

なんてったって、アタシは最強の自動人形なんだゾ!!

s i d e o u t

現在、小猫とミカの両者はパンチの連続をお互いへ勢いよく打ち合った突き比べをしてきた。

「おりやおりやおりやおりやおりやおりやおりやおりやおりや  
おりやおりやおりやおりやおりやおりやおりやおりやおりや  
おりやおりやおりやおりやおりや!!!」

「はあああああああつ!!!」

「そんなんじや、アタシには響かないゾ！もつと強く！激しく！全力でくるんだゾ!!」

ミカは一時後退すると、両掌から赤い結晶である高圧縮カーボンロッドを小猫に目掛けメチャクチャに連射する。小猫はその場を駆け回りながら、カーボンロッドをかわし続けて接近し、右ストレートをミカの腹部に食らわせ吹き飛ばす。

「ぐわっ!?!」

勢いよく吹き飛ばされたミカは、木々にぶつかり倒れるもすぐにシユタツと起き上がり、笑いながらカーボンロッドの連射を再開する。小猫はバク転で距離をとった後、近くの巨大な岩へと身を隠す。

（あの人………戦車の力同様……いや、師匠と同等の戦闘力とタフさ………そして、両掌から発射される赤い結晶………直撃は避けた方が良いでしょうね。それに、あの天真爛漫な顔といい………戦いを楽しんでいる所を見ると好戦的な性格だと断定できますし………どうしたものでしょうね………）

「おお〜い、かくれんぼは止めて早く遊ぼうゾ！じやなきやもつとス  
ンゴイのお見舞いするゾオ〜！良いノカア〜？」

小猫が岩の影に隠れながら対策を考えていると、ミカは呑気な口調  
で出てくる様に大声で小猫に話しかける。だが、返事は聞こえてこな  
い…………ミカは頭をかしげ小猫が隠れている岩を見つめる。すると、  
今まで隠れていた小猫が勢いよくミカへと向かって駆け出した。

「おっ？やつと遊んでくれるノカ♪」

ミカは両掌からカーボンロッドを取り出して、向かってくる小猫へ  
勢いよく投擲する。小猫は駆け上がりながら、カーボンロッドを避け  
る。

ミカは右手から小型のカーボンロッド3つを小猫に目掛けて投射  
する。

小猫は向かってくるカーボンロッドを紙一重で避け、ミカの懐へと  
接近し回し蹴りを腹部へと繰り出す。だが、ミカは回し蹴りを食らう  
前にカーボンロッドを掌から取り出してタイミングよく防ぐ。

「…………くっ！それなら……………」

小猫は一旦後退し、先ほど自分が居た巨大な岩を軽々と持ち上げミ  
カへと勢いよく投げつけた。

「ゾナモシ!？」

ミカはカーボンロッドを投げ捨て、巨大岩を両手でキャッチする。  
小猫は巨岩を抱えたミカの頭上へ勢いよく、飛び上がり前転しながら  
らの力強い踵落としを巨岩に浴びせる。

「……………浮鳴流奥義、岩石落脚！」

巨岩は徐々にヒビができ始め……………そして、見事に真つ二つへと分裂した。そして小猫の踵落としはミカの頭上へと吸い込まれる様に勢いよく直撃した。

「キュベラッ!?」

戦車の力や上空からの重心がかかった事により、ミカの頭は地面へと勢いよくめり込む。

小猫は地面へとめり込んだミカへ視線を向ける。試しに指で頭をつついてみるも、ミカはピクリとも反応しなかった。

「……………まあ、この程度じゃこの人は死なないと思いますけど……………さつきお腹殴った後にも起き上がってたし」

「派手に正解だ。ワタシ達はそんな簡単には死なない……………そして、ミカは最強の自動人形だ数秒もすれば派手に起き上がる」

「ッ!」

不意に後ろから声をかけられ、小猫は後ろを振り向いた。そこには先ほど待遇したミカの仲間であるレイアが気絶している一番嫌いなバカ……………久沢を掴んでいるのを視認し、嫌そうな顔をしながらため息をつく。

自分こそが最強の現赤龍帝と豪語するも、実力はそこらの雑魚に毛が生えたぐらいで勝てるのは口喧嘩程度……………そんなバカがやられても可笑しくないと小猫もわかつてはいた。だが、それと同様に自分の王であるリアスはこのバカを特別扱いしている事と喧嘩をしかけて来るので何時うつ病になっても可笑しくない。



時々夢の中で龍の姿で現れる赤龍帝ドライグと色々不満や愚痴をこぼしあっているが、お互いに利害が一致するや否やまるで本当の先輩後輩か兄妹の様な関係になっている。

まるで害虫を見る様な目を久沢に向けながら、小猫はジト目でレイアに話しかける。

「……………それで、何かご用ですか？この人を迎えに来た。と考えるても？」

「半分正解だが……………残りの半分は派手にお前に用がある。だからコイツを地味に連れて来た」

レイアはそう言うと、今まで掴んでいた久沢を小猫の目の前で放り投げる。

「……………あの、何故にこの人を？……………：戦場でバカやってる人が私に何のメリットがあるんですか？」

「なんだ、仲間と思ってるのか？」

「……………当然です。いつもいつも誰かへ喧嘩を売らないと気が済まない単細胞みたいな生き物ですよ？この人は……………」

「派手に嫌われているみたいですね？貴方の宿主は……………」

『そうだな。すまん、俺がアイツに運んでくれる様に頼んだんだ』

「ドライグさん」

『その様子だと大丈夫みたいだな、小猫』

「……はい、苦戦しましたが何とか勝てました」

『そうか』

そんな会話をしていると、先ほどまで地面にめり込んでいたミカが目を回しながらフラフラと起き上がる。レイアは起こす暇が省けたと思いながらミカに近づく。

「ムキユウく……あつ、レイア」

「地味に迎えに来たぞ、ミカ。銀時とガリィ、フアラはもうシャトーへ帰還した……私達もすぐに撤退するぞ。仕事は終わりだ」

「ソツカ……なら、ちょっと待っててくれないかゾ？アイツに言う事あるから……」

「わかった……なるべく派手に早くな？」

レイアがそう了承すると、ミカはトテトテと小猫の元へ歩み寄る。

「なあ、コネコ」

「……あ、もう起き上がってたんですね？」

「うん、お前スゴいな……アタシと互角にやり合って勝つ奴なんて初めてだゾ！なあなあ、もし良かったらまた遊んでくれないか？」

「……そうですね……あまり用事が無い時なら良いですよ？部長の気まぐれやこのバカが絡んでこなかったら話ですが……」

「良いノカ!? ヤツタアく♪またコネコと遊べるく♪でも、次に勝つの

はアタシだゾ!!」

「……………そうはいきません、連勝はいただきますよ?」

また戦える、また遊べると跳ねながら子供の様に大喜びをするミカに対して…………小猫は少しだけ笑みを浮かべた。

今の今まで戦った敵同士なのにこうしてお互いの力をぶつける好敵手となっているのだから…………小猫はこれが世間で言う『戦友』なのだと改めて理解した。

するとそこへレイアが二人に歩み寄る。

「用事は派手に済んだか?ミカ」

「うん、そんじゃコネコ!マタナ!!」

「……………はい、また」

「赤龍帝ドライブ…機会があればまた…………」

『ああ』

二人に別れを告げた後、レイアは転移結晶を地面に投げ捨て…………ミカと共にその場から消えた。

そして、小猫はいまだに気を失っている久沢を引きずりながら戦場を後にしたのだった…………

キヤスト

坂田 銀時：杉田智和

塔城 小猫：竹達彩奈

赤龍帝：立木文彦

レイア・ダラーヒム：石上静香  
ミカ・ジャウカーン：井澤詩織

## 第拾弐話 少女との邂逅

???  
side

「《01》の反応が消失しただと!？」

俺はリーダーで何度も確認するが、やはり反応が無い……まさか人外共の中に聖遺物と渡り合える奴が居たのか!？」

否、ありえない……まさか……

「第三者の可能性もありえる……か……ふつ、まあ良い。俺の遂行なる計画に狂いが生じ様とも修正すれば良いだけの話だ」

そして、俺は横の保有カプセルに入った六人の少女達に目を向けた。まだコイツらが要るかぎり俺の計画は終わらない。せつかく第二の命とこの力をもらったんだ、誰にも俺の邪魔はさせん!

「だが……先ずは《01》の搜索だな、仮にも《03》と《04》の以外の四体とアイツも貴重な試<sup>サンプル</sup>作品だ。人外共の手に渡る前に取り返さないとな?。」

俺はキーボードを一心不乱に操作しながら、そう呟いた。

翼side

――

気がつけば……そこは何処か朽ち果てた廃墟だった。

そして、そこにはボディースーツを着た私が泣きながら同じボディースーツを着た赤髪の女の子へと必死に声をかけていた。

『○○○……!』

『何処だ……翼……真っ暗で……お前の顔も……見えやしない……』

『○な○……!』

『悪いな……もう一緒に……歌えないみたいだ……』

『どうして……どうしてそんな事言うの?か○○は意地悪だ……』

『だったら翼は……泣き虫で弱虫だ……』

『それでも構わない!だから……ずっと一緒に歌って欲しい……』

『知ってるか翼?思いつきり歌うとな……すっげえ腹減るみたいだ……ぞ……』



男の人の声が聞こえて来たので、ゆっくりと壁に耳を当ててみるとふと何かが頬と両手に伝わった。

硬くて暖かく、その上にサラサラとした感触が伝わって……それで何かドクン、ドクンと聞こえた。私はゆっくり顔をあげると、銀髪で死んだ魚の目をした男の人が目の前に写った。

「はい？」

「……………」

一瞬だけ沈黙が続き……………そして……………

(ボツ!) 「イ……………」

「あり? な、何か嫌な予感が……………」

「イヤアアアアアアアアアアツ!!! / / /」

「グボアツシャアツ!!?!」

……………私は羞恥心が沸き上がって顔を赤らめ、気づかない内に叫びながら勢いよくその人のお腹へ拳を入れて突き飛ばしてしまった。

これが……………忘れもしない……………銀時恋人との初めての出会いだった。

銀時 side

あの一件が終わって2日後……………俺は昼飯を食い終わって部屋へ戻



ろうとしたら、ふと一つの部屋が目に入った。そこは例の人外狩りの一人であり、俺と戦ったガキが隔離されている部屋だ。まあ、少くらい様子を見ようと部屋を開けると……………ガキは顔を真っ赤にして俺に腹パンを食らわせた。

「ぐあああ……………久々のこの感覚……………マジで痛え……………！」

まあ……………神楽やお妙ほどじゃねえけど……………痛えモノは痛えんだよな……………

「ご、ごめんなさい！あ、あの……………大丈夫ですか？」

「これが大丈夫に見えますか？……………下手したら傷害罪で捕まるぞコノヤロー」

「す、すみません……………急に目の前に現れたから咄嗟に……………」

「咄嗟って……………銀さん、紳士だよ？女の子を襲うほど飢えてないよ？」

ガキは慌てながら俺の心配をして……………それにしても、あの時とはまるで違うな……………やっぱあのペンダント壊して正解だわ……………

余談だが、破壊したペンダントの破片は帰った後にエルフラインへ渡してある。コイツが洗脳されていた原因と、破片から何故聖遺物の反応があつたのかをつきとめるだとかで研究室に籠っているらしい。

「あの……………手を貸しましょうか？」

「ああ？大丈夫、大丈夫。銀さん、こうみえても頑丈だか……………らっつ！」

「きゃっ!？」

「ちよつとー！一体何の……騒………ぎゅう？」

俺は腹を撫でながらゆつくりと立ち上がった後に、何故か足がもつれガキを巻き込んで倒れる。そこへタイミングが悪く性根が腐った野郎……ガリイがやって来ていた。

今の俺達の状態は……ガキがうつ伏せに倒れててその上を俺が壁ドンみたたく四つん這いで屈んでいた。

ガキはまた顔を深紅にしてプルプル震えてて、ガリイは唾然としながら冷や汗をかき……

そして………

「た、大変よおおおおおおおおおおおおおおおっ!!! エルフナイン!! フアラ!! ミカ!! レイア!! ミュンツェ!! 銀時が！銀時のクソ天パーが!! 捕まえた女を犯そうとしてるわよおおおおおおおおおおおっ!!!?」

ガリイはパニクリながら、城全体に響く声で叫び始めた。いや何勘違いしてんだコノ性根腐女子はあっ!!?

「ちよつと待てえええっ!! 何俺をレイプ魔みたいにしてんだ!!! それにこれはワザとじゃ………「イヤアアアアアッ!!! / / / / ……ブゲラバツ!!?」

俺は必死に否定しようとするも、ガキは再び無防備な俺の腹にアツパーを食らわせる。もろに食らった俺は天井まで打ち上げられた。

そして一時間くらい気を失って……起きてみたらガリイ達から  
非難の目を向けられた……

――――  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

謎の少女：水樹奈々

ガリイ・トウーマン：村瀬迪与

謎の男：福山潤

天羽 奏：高山みなみ

## 第拾慘話 同棲生活

少女との邂逅から数日……銀時は茶色の帽子を頭に被って灰色のスーツにそれと変わらないコートを纏い、黒いサングラスをかけたサラリーマンみたいな格好で駒王町へと赴いていた。

「まったく……何で俺がこんな格好して、行かなきゃなんねえんだ………つと、そろそろ時間か………」

銀時は文句をたれながらも、左腕の時計の時刻を確認し……ベンチへと腰をかけた。すると向かいの場所から黒髪で紫のコートを纏い、頭にはピンクの帽子をかぶり黒メガネをかけ、紙袋を持った美女がベンチ……銀時の隣へと座る。

「お隣……よろしいですか？」

「どうぞ………」

「良いお天気ですわね………」

「そうだな………例のブツは？」

「はい………こちらに」

そう言うと、黒メガネの美女は持っていた紙袋を銀時へと手渡した。銀時は紙袋の中身を一瞬見た後、コートの懐から一枚の手紙を美女に手渡した。

「確かに……エルフナイン様の直筆に間違いありませんわ」

「ごつちもブツの確認はすんだぜ？そんじゃ俺はこれで……」

「お待ちください、よろしければこれを……」

「んあ？」

銀時が紙袋を持って立ち去ろうとすると、美女はポケットから一枚の紙切れを銀時のコートのポケットへとしのばせた。

「お困りになられた際にはそこへ訪ねてくださいまし……では……」

そう言い残し、黒メガネの美女は何処かへと姿を消した。銀時は美女が行ったのを確認し、紙袋を持ってその場を後にした。

――

数分後、銀時は駒王町で有名な高級マンションへと足を運んでいた。エレベーターで上の階へ上がり、「1010号室」と記入された部屋のドアを開け、玄関に靴を脱ぎ捨ててリビングへと入室した。すると、そこにはシャトーで拘束されている筈の青髪の少女がソファ―に座わりながら読書を嗜んでいた。しかし、未だに囚人服を纏ったままだが……銀時はお構い無しにコートを脱ぎ捨てる。

「帰ったぞ〜」

「おかえりなさい」

「おお。ほい、プレゼント」

「あの……これは？」

「お前の服だよ。何時までもその格好だと味気ないからよ？知り合いから調達してもらったってわけ」

「すみません銀時さん……私の為に……」

「これぐらい気にすんな。それと銀時さんはよせつて言つたろ？翼」

「あ……ごめんなさい。でも年上の人は敬語で話さなきゃと思つて……」

「あつそ、ふわあく そんじゃ……俺は一眠りするわ……何かあつたら起こしてくれ……」

「うん……お休み、銀時／＼」

「ああ」

何故……銀時が、件の少女―翼と高級マンションで同棲しているのか……それは数日前から遡る。

――回想――

『ええ……これより被告人、坂田 銀時氏の裁判を執り行います。まずは検察官のレイア・ダラーヒム氏、被告の罪状を述べてください』

『派手に畏まりました。被告、坂田 銀時は数時間前……こちらで隔

離している被害者に性的暴行を行おうとしました。よって、被告には有罪判決を……『おい、何してんだてめえら?』……派手に見ての通り、お前の裁判だが?』

『だから、アレはワザとじゃねえって言ってんだろが!』

『裁判長、被告には反省の態度が見えません!即刻、死刑判決を!!』

『てめえもてめえでなに俺を死刑にしようとしてんだ!?そもそもお前が……』被告は静粛に!ここは裁判所ですよ?』何でお前まで役になりきってんだあ!』

あの一件の後、セクハラの疑いをかけられた銀時はエルフナイン達シャツの住人により開かれた大裁判の被告となっていた。配役はフアラを裁判長、レイアが検察官、傍聴席にはガリイとレイアとあまり変わらない容姿と服装でも髪をツインテールにし、スカートを穿いた少女ーミュンツェ・ダラーヒムが座り、エルフナインとミカが警察官役で銀時を挟むように座っていた。

『被告に反省の態度が見られませんので、判決を言い渡します。被告人、坂田 銀時を有罪。チフォージュ・シャツーから追放する事をここに言い渡します!』

『ちよつと待てえつ?!異議は無しかよ!せめて被告にも証言を……』  
『以上で、法廷を終了いたします』無視すんなあああつ!!!(ガブツ?)  
ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ  
!!!??!』

むちゃくちゃな裁判に銀時は納得いかずに怒鳴るが、いつの間にかミュンツェが勢いよく銀時の頭にかぶりつくど銀時の叫び声で裁判は幕を閉じたのだった………

――回想終了――

裁判が終了した後、必要なお金（1億円）とこの部屋の契約を受けた後にシャトーを追い出され、その後に翼がやって来てから二人の生活が始まった……因みに銀時が出会った黒メガネの美女は変装をした朱乃でエルフナインの頼みで翼の服を代わりに買ってもらったのだ。

「ったく、今思えばヒツデエ裁判だったよなあ……つか、何でお前がいんの？」

「姉から銀時の見張り……頼まれた」

「あいつ、いつかぜってえ締める……！」

何故かシャトーにいる筈のレイアの妹であるミュンツェがベッドの下へと潜り込んでいた事に銀時はレイアが見張らせるために寄越したのだと確信し、青筋をたてながらいつか報復をしようと拳を強く握りながら決心する。

だが、度重なる疲労でそんな暇は無く……銀時はゆっくりとベッドに沈む様に寝転がると、そのまま意識を手放した。

銀時が寝たのを見届けると、ミュンツェはリビングに足を運ぶ。リビングに入ると翼が囚人服から銀時が持ってきた新しい服に着替えている最中だった。

「キヤツ!?……あ、ミュンちゃんだったんだ……ビックリした……」



「着替え中にごめん……………」

「ううん、平気…………ちよつと待っててね？今、脱いだ服を片付けるから」

「そう…………ツ!？」

新しい服を着替え終わった翼はそう言いながらソファーに置いてある囚人服を直そうと後ろを向くと、ミュンツェは彼女の首もとを凝視した。首もとには《SA—01》とナンバー形式が入れ墨の様に刻まれていたからだ。何か怪しいと考えたミュンツェはリビングを出て、部屋の一室から姉であるレイアに連絡をとった。

「姉、ミュンツェ……………」

『どうした妹よ、銀時がまた地味にハレンチな行動をしたのか？』

「違う…………翼の首もとに…………ナンバーがあった」

『ナンバー…………形式はわかるか？』

「うん…………形式は《SA—01》…………これからどうする？」

『そうか…………私はエルフナインにこの事を報告する。妹よ、もうしばらく銀時と行動を共にしろ…………そして翼嬢をなんとしても派手に守れ』

「わかった…………姉も頑張つて……………」

そう言つてミュンツェは連絡を終了し、翼を守る…………その使命を心に刻みつけるのであった。

キャスト

坂田 銀時：杉田智和

風鳴 翼：水樹奈々

姫島 朱乃：伊藤静

フアラ・スユーフ：田澤茉純

レイア・ダラーヒム：石上静香

ミュンツェ・ダラーヒム：佐藤利奈

ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

第拾貳之伍話 解き放たれし絶刀は白夜叉と共に  
……①

あの裁判騒動から翌日……

「ったく、アイツ等本当に追い出しやがって……ワザとじゃねえつてのによお……」

銀時は唐草模様の風呂敷に必要なモノを詰め込んで、エルフナインが用意したというアパートへと向かっていた。まだ先日の裁判事件が頭に離れずにトボトボと歩いていると、喫茶店に目を向けた。

「そーいやここ最近甘いモン食ってねえんだよなあ……まあ、金もたんまりある事だし、久しぶりに食ってくか」

銀時は気分転換に甘いモノを食べようと足を運び、喫茶店へ入店する。

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

「1人だけど？」

「畏まりました、少々お待ちください」

店員が離れていくのを見届け、銀時は店内を見渡した。店内は明るく、まるで洋風レストランを思わせる雰囲気が漂っていた。すると、店員が申し訳なきさそうにやって来た。

「お客様、申し訳ありませんが……ほぼ満席なので相席で宜しいでしょうか？」

「相席ねえ……まあ、別に構わねえよ」

「そうですか……ではこちらに………」

店員に席を案内されると、そこには見覚えのある白髪の少女と金髪の青年が座っていた。

「あ………」

「………」

そう、グレモリー眷属の塔城 小猫と木場 祐斗の二人である。銀時は二人に気にせず、席に座る。

「貴方は………」

「………」

「ああ……気にすんな、今日はお前等とやりあう気はねえからよ？それに考えてもみな、店内でバカ騒ぎすりゃ他の客や店員にも迷惑がかかる……違うか？」

「……祐斗先輩、この人の言い分にも一理あります。私達もお客の一人ですからここは………」

「そうだね……わかりました、僕達も争う気はありませんから」

「話が分かって助かる……やっぱり何処ぞの馬鹿とは違うな」

「……当然です、私達は部長みたく何振り構わず突っ走らない主義ですから」

「そうかい。あ、すみませんパフエ一つ！」

小猫のきつぱりとした発言に木場は苦笑すると、銀時は納得しパフエを注文する。

「えっと……まだ自己紹介はしていませんよね？僕は木場 祐斗。駒王学園の2年生で、グレモリー眷属の騎士です」

「同じく塔城 小猫……1年の戦車です」

「……丁寧にも、んじや改めて……俺は坂田 銀時だ。名字以外なら好きに呼んでもいいぜ？」

「それじゃあ銀時さんと呼ばせてください」

「……私はキヨンで」

「おい、それ何処の男子高校生？確かに声は似てるけどよ……銀さんは大人だよ。バリバリのダンディだよ？」

「……それじゃ、銀さんで」

なんて、ほのぼのな自己紹介をしていると店員が注文の品を持ってきた。

銀時はチョコレートパフエを、小猫はショートケーキと抹茶ケーキ、チーズケーキにチョコレートケーキのケーキ四品、木場はミルク

ティーとモンブランをそれぞれ食べ始める。

「それで銀時さん……お聞きしたい事があるんですが……」

「プライベート以外ならオツケーだぞ」

「いや、プライベートとかじゃなくて……」

「……銀さんの目的はなんですか？もしかして、部長の不正……それとも人外狩りの事ですか？」

「小猫ちゃん唐突すぎるよ……とゆうかそんな重要な事を答えてくれ「いいぜ」え？良いんですか!?そんな簡単に……」

「まあな、これはお前ら悪魔や他の人外……そしてこの町にとって知らなきゃなんねえ事だから……この事は他言無用って約束してくれるか？特にお前らの所にいるご主人にはな……」

銀時は二人に、自分が関わっている案件について話した。いずれ二人の主であるリアスが三大勢力を巻き込んだ大事を起こし、数年前に起こった戦争を防ぐ為の再戦回避……人外狩りの正体が誰かに洗脳され、聖遺物の力を使っていたごく普通の少女だけで構成された組織だと言う事……自分が錬金術師のキャロルに協力している事は伏せつつその他の事は全て話した。

全てを聞き終えた二人は目を見開きながら、冷や汗をかいた。まさか自分達の主君が戦争再起の火種を起こそうとは思ってもしいなかったからだ。

「……まあ、あの人がやる事はむちゃくちゃだと思ってましたが……それを聞いた時点で度が突破し過ぎますよ……」

「だから銀時さんは部長を説得しようよ……」

「まあな……だけどアイツ、自分の種<sup>悪</sup>族<sup>魔</sup>信仰にとっぷり浸かってやがるからよ………どんだけ家が裕福なんだか………」

(まあ、実質……魔王の妹ですもんね。あの人は………)

「話は良く分かりました。そう言う事なら僕等もできるだけ協力します」

「………そうですね、主の不始末を防ぐのも私達眷属の仕事ですからね………フルボッコにしても止めさせます」

「小猫ちゃん、それはさすがに……」

「まあ、ほどほどにな？…そんじゃ俺はこれで………「待ってください」あ？」

「………よろしければアドレス交換しませんか？」

「そうだね。もしもの時に連絡でき………あ、銀時さんは携帯は……」

「携帯？………ちよつと待ってろ。ああ………あつたあつた」

銀時は風呂敷からエルフナインが連絡の為に渡した携帯を取りだした後、二人の携帯のアドレス交換をした。

「ほい、これで良しと。そんじゃ、今度会った時は敵じゃねえ事を祈るよ………」

「はこ」

「……また今度」

そう言い残すと、銀時は風呂敷を持って喫茶店から去って行った。そして、再びアパートへと向かおうとすると……路地裏で制服を着た二人の男子高校生が目映った。

「おいおい、今時カツアゲかよ……って、アイツは……」

男子高校生の1人は先ほど出会った木場と小猫と同じくグレモリー眷属の久沢だった。銀時はまた面倒事になると知りながらも、ゆっくりと二人に歩み寄ろうとすると、二人と同じ制服を着た茶髪の少年がやって来た。

「いいから金出せって言ってるんだよ!!」

「そんなの持ってませんよ……」

「てめえ、一年の癖に口答えする気か!」

「止めとけよ、ソイツは持ってねえって言ってるんだろ?」

「兵藤 一誠……!」

「相変わらず下らねえ事やってんだな? 久沢……」

「うるせえ……いつもいつも突つかかって来やがって!! てめえみてえなモブはお呼びじゃねえんだよ!!」

久沢は茶髪の少年―兵藤 一誠に殴りかかるも、一誠は久沢の拳をいなした後に背中へ一蹴り入れて吹き飛ばした。



「グガッ!？」

「おい、早く逃げろ」

「は、はい！ありがとうございます!!」

久沢が地べたへ倒れた後、一誠はその間にカツアゲされそうになった少年を逃がした。

「てめえ……ブチ殺す!!」

「はあ、そのセリフ……何千回聞いたんだけどな？」

「ダメレ!!!」

久沢は勢いよく拳を振るうが、一誠は簡単に捕まえる。

「弱い」

そして右のジャブで顔を殴り、よろけた処に腹部に蹴りを入れる。

「ガッ!？」

「沈め」

前のめりになった所へ、頭部に踵落としを食らわせ地面へと蹴り落とす。

「ガハッ!？」

「こんくらいすりや、嫌でも……いや、無理かコイツには考える脳ミソもなかったな？」

「コ、クロス!!……いつか、必ずてめえを……この手………ガアツ!？」

「寝言は寝て言え、馬鹿が」

憎悪を込めた睨みをする久沢を無視し、一誠は久沢の頭を思い切り踏みつけた後に……その場を後にした。

「俺が出るまでも無かったな……さてと、早く行くか」

それを見ていた銀時は一部始終を見届けた後、アパートへと再度向かった。

—————  
キャスト

坂田 銀時：杉田智和

兵藤 一誠：梶裕貴

久沢 戒斗：小野大輔

木場 祐斗：野島健児

塔城 小猫：竹達彩奈

店員：高垣彩陽

男子高校生：喜多村英梨

第拾貳之伍話 解き放たれし絶刀は白夜叉と共に  
……②

グレモリー眷属の木場達と対面して連絡先を交換した後、銀時はエルフナインが用意した高級アパートへと到着した。

「おいおい……少しばかり場違いじゃねえのか？」

銀時はあまりのアパートの高さに、冷や汗をかき顔をひくつかせた。そうこうしても着いた事には変わりはないと切り替え、入り口近くの管理人室へと顔を覗かせると……紫のショートカットの女性がやって来た。

「何か用か？」

「新しくこのアパートに住む坂田 銀時だ……部屋の鍵をもらえるか？」

「坂田……それなら業者から聞いている。それで、何号室の鍵だ？」

「ちよつと待てよ……えっと、「1010号室」……って、意外と俺の誕生日と同じだなオイ」

「ほお……その口振りだと、10月10日生まれか？」

「まあ……一応な」

銀時は物心ついた時から親の顔も……名前も……誕生日も知らず、浪人を殺して生きてきた。しかし、恩師や旧友と出会い……鬼から坂

田 銀時として……一人の人間として生まれたのが鍵の番号と同じく10月10日である。

「そうか……これが部屋の鍵だ。それと、私はこのアパートの管理人の三月・スカリエツティだ」

「あつそ、そんなじゃよろしくなゴリラ」

「おい、誰がゴリラだ」

「え？だってその体格とかでゴリラって呼ばれるだろ？俺の知ってる奴でもストーカーしてるゴリラは居るぞ」

「そいつと一緒にするな！それと、私はゴリラじゃない!!」

「おいおい、別の小説サイトでもゴリラって呼ばれてるぜ？いい加減に受け入れろよゴリラ・ゴリラ・ゴリラ」

「メタな発言は止めろ！それから学名で呼ぶな!!」

あーだこーだと管理人のゴ……三月と口論を繰り広げ……

『おい！今、ゴリラって言おうとしたな!?!そんなに私をゴリラにしたのか!!貴様!!』

………その後、銀時はエレベーターを使って 「1010号室」 へとやって来た。

「さてと………すんげえ嫌な予感がするのは、気のせいにして………さっさと入るか」

銀時は先程もらった部屋の鍵を使い、ドアを開けて入ってみると  
.....

「.....」

「え、ええつと.....その.....」

「いや、何でお前が此処にいんの？」

そこにはシャトーで隔離されているはずの少女がいつの間にか部屋の一室で正座をしながら座っていた。

「あ、あの.....これ、ガリイさんから.....もし、貴方が来たらこれを渡しておけて.....」

「あ？あの性根腐女子がか？」

少女はすくつと立ち上がって、ポケットから一枚の封筒に入った手紙を銀時へ手渡した。

銀時は手渡された封筒から手紙を取り出して開くと、書かれている内容を読んでみた。

《拝啓、銀時の天パーへ……》

この手紙を読んでいるって事はもう、アパートの部屋に入室した頃でしょうね？それなんだけどモノは頼みで、そこにいる女をアンタに任せる事になったからちゃんと守りな！これは私達で話し合った事で、もし断るってんなら金輪際生活に必要なお金やアパートの家賃、そして約束の依頼金はやらないからそのつもりで……

追伸……

ソイツの服とかは知り合いに調達させるから心配いらぬ事。

それと、ソイツと外出する時は一緒に同行する事。

これらを守る様に頑張つてねえ☆

ガリイ・トゥーマンより》

手紙を呼んだ直後、銀時は手紙を破りながら怒鳴りたい衝動に駆ら

れたが心配そうな顔をした少女の手前とアパートの室内にいるのでそれは押さえた。

また日がくれて、暗くなり騒ぐのもアレなのでご近所迷惑になりかねない。

「……まったく、あの野郎……いや、他の奴等もか、どいつもこいつもホント」

「あ、あの……」

「んあ？ああ、こっちの話だ」

「いえ、そうではなくて……」

少女は申し訳ない顔をしながら銀時の前で正座をして、深く頭を下げた。

「え？ちよ、何やって……」この前の事はすみませんでした……！「あ？この前？」

「……何の理由も無しに貴方に手を出してしまった事……私の性で変な濡れ衣を着せてしまった事……それで、いつかこの前の事を謝りたいと思っていて……本当に、本当にすみませんでした!!」

そう言いながら少女は頭を下げたまま、涙をポロポロと流しながら銀時へ謝罪を繰り返した。

「……気にしてねえよ、てか顔をあげてくれ」

「……？」



「まあ、ああなったのは俺の不注意でもあるからな。お前自身が責めることあねえよ」

「……………それだけじゃありません……………私は……………見ず知らずの貴方に……………刃を向けてしまったんです」

「ッ!?……………お前、あの時の事も覚えてんのか?」

銀時の問いに、少女は頷いた。

「少しだけですが……………今でも忘れられないんです……………怪物と戦った感覚、人を斬った罪悪感、そして……………自分が自分で無くなってしまいう、狂いそうなくらい……………思い出すだけでも、辛くて……………怖くて……………もう、狂いそうなくらい……………殺してくれと叫んでしまいたいくらいに……………」

「……………」

「もう、数えきれない程の罪を犯してしまった……………こんな私に……………大罪人である私にもう生きる資格なんてないんです!!!」

「……………ッ!」

ーパチンツ!

銀時は少女の頬に、鋭い平手打ちを浴びせた。いつもの様に死んだ魚のような目付きだが今は違う。冷たく光る瞳、地を這うような威圧感を放っていた。明らかに銀時は怒っている、少女はあまりの怒気に叩かれた痛みや罪を犯した哀しみを感ぜられずに慄いた。

「生きる資格がねえ？んなもん誰が決めた……お前か？それとも神様か？んじや……てめえがここに居るのは死ぬために来たのか？」

「…あ……ああ………」

「命は一つしかねえ……死んじまったらそれで終わりだ。もし、罪を償いたいつてんなら俺が手を貸すし支えてやる……でもな、今度死にてえなんてぬかしたら、その時は……勝手に死のうが俺は止めねえ……その死ぬ覚悟がお前にはあるか？」

「あ……ああ………」

怒気に溢れた銀時の言葉に少女は、大きく首を横に振るった。

銀時は少女の反応を見ると近くに寄り優しく、それでいて放さないよう強く暖かく抱きしめる。

「なら、二度とそんな事を言うな……辛い事、苦しい事があつたんなら俺の胸で思いつきり泣け、泣いて泣いて全部ぶちまけりや……少しは気分が晴れるだろ？」

「……ひつく……うっ……ゴメン……なさい……ゴメンなさい………」

少女は銀時を抱きつき、彼の胸で……声が枯れるまで泣き続けた。銀時は少女が泣き止むまで、暫く抱きしめた。

――そして、翌日

「ん……んん……」

少女はゆつくりと瞼を開け、辺りを見渡すと見覚えのある白い着物を掛け布団がわりにして寝ていたらしい。その隣では、壁に寄りながらグースカといびきをかきながら眠る銀時がいた。

「どうして……この人が……あ、そうか」

頭をフル稼働させて状況を整理していくと、自分がこのアパートで銀時と生活をする事になったのだと思い出したのだ。すると、扉から黒髪の黄色と黒の縞りボンで短いツイントールにし、黄色と黒を基調としたドレスを着た女の子が入ってきた。

「……起きた？」

「貴女は……」

「私、ミュンツェ・ダラーヒム……姉の頼みで……貴女の護衛しに来た」

「そうなんだ。私は風鳴 翼、よろしくね」

「ん……よろしく……それと私が居る事は……この人には内緒にしてね？」

「う、うん……わかった」

「ありがとう、それじゃ」

そう告げるとミュンツェはその場から姿を消した。変わった娘だ

など感じた少女……翼は、掛け布団代わりにしていた着物をたたんで銀時の側へ置いた。すると、銀時の顔が少しばかり近くなったのを感じると胸が高鳴るのを感じた。

(何だろう……この人の……銀時さんの事を考えていたら、ちよつとだけ胸が熱くなつて……なんだろう、この感じ……)

翼は胸の奥に疼く謎の感覚に少しばかり、考えてはいたが……それと同等で犯した罪の重さに自暴自棄になりかけた自分に手を差しのべてくれた事にお礼がしたい……そう思えたがどうやって、何をすれば良いかはわからない……

(ちよつと恥ずかしいけど、これなら……)

そう思いながら意を決して顔を赤くしながら、ゆっくりと唇を銀時の唇に重ねた。

……そう、キスである。

「これが私にできる……貴方へのお礼……」

そう笑顔で呟いた後、極度の緊張感と羞恥心が消え翼は再び夢の世界へと旅立った。

……一方の銀時と言うと……

「俺、こういうお礼は初めてなんだけどな……」

実は翼が着物を置いた直後に目を覚ましてはいたが、ずっと狸寝入りをしていた。だから、翼がした事はバツチリと覚えているのだ。向こうはファーストキスであろうが、銀時にとってもファーストキスなのである。

昨日の事はあまり気にしていない事を確認しながらも、銀時は再び眠りについた。

キヤスト

坂田 銀時：杉田智和

風鳴 翼：水樹奈々

ミュンツェ・ダラーヒム：佐藤利奈  
ガリイ・トウーマーン：村瀬迪与

三月・スカリエツテイ：木川絵理子

## 第拾肆話 巡り会う主役

一誠 side

重い瞼をゆっくり開けて眩しい光が目に入ったのを感じ、欠伸をした後に……俺は近くに置いてある目覚ましを取って時刻を確認する。

「6:00」か……」

『ククク………良い夢を見れたか?………小僧』

「誰が小僧だ……俺には兵藤 一誠っていう名前があんだよ」

『まあ、そう言うなよ。俺とお前の仲だろう?』

「うっさい」

俺は頭から聞こえてくる声とそんなやり取りをしながら、制服に着替えた後に朝食と弁当の準備に取りかかる。

準備が終わった後、俺は必要な勉強道具と作った弁当をカバンに入れてアパートの部屋の鍵をつけた後に通っている学園に向かった。

「なあ、聞いても良いか?」

『なんだ、彼女ができたのか?』

「なんでそうなんだよ」

『そりや、お前から聞いてくるのは恋の相談か女の裸の仕組みぐらいだろ?』

「アホか、あのスケベ二人と一緒にすんな……リアス・グレモリーについてだよ。お前、あの女が悪魔だつてわかってんだろ？」

『リアス・グレモリー……ああ、グレモリー家の自称次期当主か。それより良くわかったな？』

「あの女が旧校舎を部室にして部長してる……オカルト研究部だ？ 彼処やあの女から悪魔の匂いがプンプンすんだよ」

『ククク……お前の鼻は犬より敏感だからな？』

「誰かさんの性でな？」

『そうか？俺には心当たりが無いけどね』

惚けててもわかんだよ……俺がお前と出会った時から、感覚が人一倍敏感になった事ぐらい。

そう思いながら、通っている駒王学園の生徒玄関に差し掛かった所で……

「待ちなさいよ、このエロコンビイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!」

「また懲りずに覗き見しようとしたわねえええええええええええ!!!」

「女の 敵!! 今日こそ、死刑にしてやるうううううううううう!!!」

「乙女の裸を覗いた罪！万死に値するわよおおおおおおおおお!!!」







でもね、キャロルから此処で働けて命令貰って仕方無く教師をやる羽目になったの!!

とそうこうしてる内に学園長室に到着したので、俺はドアを軽くノックした。

ーコンコン

「すみませくん、新しくこの学園に就任した坂田 銀時ですけども」

「入りたまえ」

部屋から渋い男の声が聞こえたので、部屋に入ってみると……一番目立つ机には黒いスーツを纏って灰色と若干白に染まった髪にメガネをかけたオッサンが座っていた。どうやらこのオッサンが学園長みてえだな？

「私が駒王学園の学園長を務めている浮鳴うきなり 八紘やつひろだ」

「ご、ご丁寧どうも……浮鳴学園長殿……」

「……………」

スルーかよ！少しは反応してくれないと怖いんだけど!?!しかも、じっと見つめてくるし!!

「失礼します」

ふと後ろから聞き覚えのある声がして、振り向くとリアス・グレモリーとリアスと同じ制服を着用した黒髪のセミロングでメガネをかけた女……確かソーナ・シトリーだったか？グレモリー家と同じで悪

魔の貴族であるシトリー家の次期当主……だったな？

二人は室内に入室すると、リアスは俺を見るなり顔を歪ませた。

「あ、貴方は!!」

「リアス、八紘学園長の前ですよ……はしたない」

「八紘、これはどういう事!?何でよりもよつてこの男がこの学園に……」

「おいおい、学園長を呼び捨てとか……頭おかしいんじゃないのか?お前」

「貴方の意見は聞いていないわ!!」

「彼にはこの学園の教師をしてもらう事になった……それが事実だ」

「そんな勝手に許されると思ってるの!?この男は私を散々侮「これは君の兄、サーゼクスが決めた事でもあるのだが?」お、お兄様が!」

リアスの反応を確認すると、学園長は呆れて目を閉じたままため息をついた。

「その様子だと、聞いていなかったようだね……」

「……何なのよ、その聞いていなかったって」

「はあ……敢えて魔王様達が、貴女や私へこの件について、グレイフィア様と弦十郎様から言い渡された筈ですけど……まさかご存知なかったのですか?」

「伝言………ッ！」

リアスは目を見開き思い出したと言わんばかりな顔で、冷や汗を流しながら取り乱し始めた。

「う、嘘よ！お兄様が……魔王様方がこんな男を!!」

「こんな男……リアス、貴女は魔王様方がお決めになられた事を否定するのですか？それは魔王様や貴女のお兄様であるサーゼクス・ルシファー様を侮辱した事になるのですよ？」

「そ、それは……」

「では、彼の件は私に任せてもらえるかな？」

「わかりました。では、これで失礼します」

「……………くっ！」

そう言い残してリアスとソーナ・シトリーは部屋から出ていった。俺はふと学園長に視線を向けた。

「学園長……アンタ……悪魔だったのか？」

「その質問は不正解だ。私は普通の人間……弟が魔王の女王クイーンをしていてね、彼等と面識があるだけだ」

「そ、そうなんすか……………」

弟が悪魔で女王……どんな絵面？

「さて、早速だが……君にはクラスの担任を請け負ってもらおう」

「担任って……まあ、銀八先生原作でもやってたから問題ねえけどよ……」

「原作？何の事かね……」

「ああ、いや！こつちの話でして……どうぞ気にしないでください！  
アハハ……!!」

やツベえ……うっかりメタやつちまう所だった……

「そうか……では、宜しく頼むよ坂田 銀時君」

「はい！お任せください!!」

不安だな……これからが……

キヤスト

坂田 銀時：杉田智和

兵藤 一誠：梶裕貴

松田：内匠靖明  
元浜：中國卓郎

リアス・グレモリー：日笠陽子  
ソーナ・シトリー（支取 蒼那）：高森奈津美

浮鳴 八紘：山路和弘

女子生徒1：小林ゆう  
女子生徒2：白石涼子  
女子生徒3：石原夏織  
女子生徒4：斎藤千和

謎の声：中尾隆聖

## 第拾伍話 新任教師

一誠 side

俺は教室に入って自分の机に座り鞆を置くと、中から筆記用具や教科書類を机に仕舞う。

すると顔がボコボコに丸く腫れ上がり、制服もズタボロで這いつくばりながら教室にやって来た松田と元浜のエロコンビ。二人は俺をギリリと睨むが、俺はいつも通り無視して持ってきたライトノベルに目を通す。

そうしてたら……………

「失礼する」

『えっ？が、がが、学園長先生エエエエエエエエ!!??』

この学園の最高権力者である浮鳴学園長が入室してきた事にクラス全員（俺除く）が驚きを隠せないでいた。学園長自らこの平凡で普通の二年クラスにやって来るなんてな？

『どういう風の吹き回しだ？』

「知るかよ……………そんなの」

「おはよう、二年B組の諸君……………今日、私が君達の所へやって来た理由は一つだ。以前、君達の担任である橋田 頼継先生が問題行動を起こし警察へ逮捕されたのは知っているはずだ……………そこで君達の新しい担任を赴任させる事を私自ら報告しに来たと言う訳だ」

「新しい担任すか!？」

「うっわっ!マジかよ……」

「男かな?女かな?」

「そりゃ女が良いだろ……巨乳、パツキン、ボツ!キュツ!ボン!!つてな美人教師な設定で!!」

「ふっ!甘いわね?きつとイケメンよイケメン!!ハンサムで頭脳明晰な殿方か、マッチョでスポーツ男子のどっちかに決まってるでしょうが!!」

「なに言ってるんだ!絶対女性の美人教師だ!!」

「いいえ、ハンサムな美男教師よ!!」

学園長の爆弾発言に戸惑うクラス……ついには男や女かを異論する争いが勃発。俺は学園長に顔を向けると、呆れながら冷や汗をかいている仕草をしていた為……俺は握りこぶしで机を勢いよく叩きつけてギャーギャー喚くクラスメイト達を黙らせた。

ードンッ!!!

『!?!?』

「……ウルセエ、シズカニシロ」

『は、はい……』

殺気を少しばかり混ぜた言葉をぶつけると、さっきまで喚いてた連



中は冷や汗を滝のように流しながら沈黙した。

……ちよつとやり過ぎたな。

「静まったようなので、話を戻そう……先ずは新しい担任の紹介だが、外に待たせてある……入りたまえ」

「ういゝつす」

廊下から気の抜けた男の声が聞こえると、教室の扉が開き……銀髪の天然パーマでメガネをかけ、カッターシャツと黒いズボンを着用し白衣を纏った男が入ってきた。男連中は舌打ちをしていたり、血の涙を流しながら下唇を噛みしめて悔しそうにしてる奴がいたり……女子達は目を輝かせていたり、半ば幻滅した奴もいた。

「今日から二年B組の担任になった坂田 銀時だ。先生とか慣れないから気軽に銀さんか、銀ちゃん……好きに呼んでも問題無いから。因みにキャプテン志望で好きなモノは糖分と男の夢とロマンが詰まったジャンプだ……何か質問はある？ああ、プライベートとかはキャンセルね。ジャンプ関連の質問とかはできる限り受け答えすつから」

あ、この先生一癖ある奴だ。

俺がそう思っていたら、不意にごく一部の女子達がプルプルと震えていた。その光景に俺や男子連中、他の女子や学園長に新任の先生が注目する。



「ふむ……こんなにも早く生徒達と親しくなるとは………これも青春なのだな………」

「イヤ、なに納得してんですか学園長!？」

『クク……ハハハハ!!こりや面白い奴が出てきたな!!まあ、小僧の担任みたいだから精々一年間楽しくしろよ!!ハハハハハハハハハハ!!』

(うっせえー!テメエは黙ってろ!!っーかその笑いウゼエ!!!)

そう……これが俺、兵藤 一誠と新任教師である銀さんとの邂逅と………狂った物語の序章の始まりでもあった。

エルフナイン side

ーカチャカチャー―ピコン……ジ―、ジ―

ーテテン!

「ふーっ、やっとできた………」

ボクは汗を拭いながら、培養液の入ったカプセルの中にある紅いクリスタルに目を向ける。翼さんとの戦いの後で銀時さんが回収した

ペンダントの破片の修復を終え、そこから聖遺物『天羽々斬』のデータを調べていた。翼さんの洗脳はこのクリスタルに組み込まれたマインドコントロールの一種だったらしいけど、プログラムの切除は完了したからこのクリスタルは問題は無く……至って正常だ。

切除したプログラムはファラとガリイにアザゼルさんの仕切る墮天使組織神の子を見張るもの本部へ届ける様頼んでいる……アザゼルさんは発明とか仕事の次に好きだからな……

「う……うっーん！さて、続き続きつと」

ボクは背伸びをし、データボードを操作しながら《天羽々斬》のペ  
ンダントの解析と改造を開始した。

—————

キャスト

坂田 銀時：杉田智和

兵藤 一誠：梶裕貴

謎の声：中尾隆聖

エルフナイン・マールス・デインハイム：久野美咲

浮鳴 八紘：山路和弘

第拾陸話 ヤギとか〇はめ波

――――数年前――――

―ザアアアア………！

日の光が隠れ、灰色に染まった空に一粒……二粒と次々に雫石が落ちて雨と変わった駒王町の公園のブランコに座った一人の子供が黄昏ていた。子供の名は兵藤 一誠……彼は両親を早くに事故で亡くし、ほどなく親戚に引き取られたが……その親戚はアルコール中毒で幼い一誠に酒を買わせようとしていた。もちろん当時の一誠にはお酒を買う事はおろか、買い方もお金の使い方も知らなかった。

しかし、その親戚は何も知らない一誠へ怒りを露にし”しつけ騷”と言わんばかりに暴力を振るった。最初も一誠は親戚の家族に助けを求めたが……家族も誰もが自分は関係無いと言わんばかりに助けを求めぬ一誠を見放した。

”しつけ騷”と言って暴力を振るう親戚と、助けもしない親戚の家族

……一誠は暴力と孤独……そして死の恐怖に耐えきれなくなり、親戚が住まう家から逃亡し今に至る。

一誠の瞳から雨と共に涙がぽつり、ぽつりと流れ……首もとにかけた銀色のロザリオを見つめ鳴嘔を漏らす。

『ヒッグ……ヒッグ……お父さん……お母さん…………イリナちゃん……』

抑えきれない悲しみに一誠はいなくなってしまった両親と、親の都合により外国へ旅立ってしまった幼なじみの少女の名を呼びながら泣いた。

何故こうなってしまった……

何故、両親は自分を置いて死んでしまったんだ……

何故、自分がこんな仕打ちを受けなくてはならない……

自分が一体、何をした……………

憎い……………この町に……………いや、世の中にある全ての不条理が怨めしい……………!!

一誠は怨んだ……………自分の見に起きた不幸を、己が惨めな運命……………そして、自分の大切なモノを守れず、ふりかかる不幸と理不尽な運命を打ち砕けない自身の弱さを……………

自身の運命に対する哀しみと共に、己が弱さに対する怒りを募らせていると……………

『おや？<sup>ド</sup>首領、こんな雨の日に子供が一人で……………』

『あろ？本当であろーしかし何故……………』

入り口付近で二人の男性の声が入った。一人は30代から40代くらいの男性で、もう一人は初老の男性だと一誠は推測できた。

『これ、その子供。お主なぜ泣いておろー？』

『ふえ……っ？』

一誠は声をかけられ、ゆっくりと顔をもちあげた。

その目前には身長は自分と同じくらいあり、二つの横長い黄色の瞳に頭に生えた二本の小さな角、白い毛皮をした何か……だが、一誠はその何かの正体を知っていた。

『しゃべる……ヤギさん？』

そう、ヤギである。



だが、そのヤギは黒いマントを纏い二足方向だ。どう見てもヤギ、何処から見てもヤギ、絶対ヤギである。

そのヤギの傍らに居るのは道場着に似た和服を着用し、顔を布袋で覆った男性で、日本通なのか古典好きなのか番傘で雨をしのいでいた。

『失敬な！誰が”しゃべるヤギさん”であるー!?非道秀麗、極悪非道！イタリアマファイア【ヴァレンティノーファミリー】を束ねる首領!!我が名は首領・ヴァレンティノツ!!!』

『さすがは首領！素晴らしい名乗りでしたよ!!』

『褒めるでなかるー テレるであるー』／／／

一誠がヤギと呼んだのが気に入らないのか、自分の素性を悪役の名乗り風に名乗ったヤギ……ヴァレンティノーは蹄を一誠に向ける。袋の男はヴァレンティノーの名乗りが素晴らしいと拍手喝采で褒めちぎり、褒められた彼はテレる様にクネクネと揺れる。

そんな二人のやり取りを見た一誠は、少しだけ笑みを浮かべた。

『……クスッ』

『ちよつと、貴方何笑っているんですか？首領トシがかつこよく名乗ったと言うのに何処に笑う要素があると言うのですか!?首領トシに対して失礼千万ですよ!!』

『ヒツ……!』

『落ち着くであろー ロレンツオ!相手はまだ年端もいかぬ子供であろー!!』

『はっ!?す、すみません……つい………』

袋の男……ロレンツオは威圧感で睨みながら先ほど笑っていた一誠にドンドンと少しずつ歩み寄る。ロレンツオを怖がっている一誠を見たヴァレンティノーは、一誠の前に立って彼を宥める。

『すまぬのこやつはワシの右腕なのじゃ。それよりも、お主こんな天気に何故公園におろー?親が心配するのであろうに……』

『………お父さんとお母さん……もういない……僕を置いて死んじゃったんだ………』

『そうであったのか………辛かったらうの………』

一誠の事情を知ったヴァレンティノーは、一時考える………

そして、頭の電球がピカリと輝いた瞬間にヴァレンティーンは一誠に思い付いた提案を述べた。

『……のお、子供。もし良かったらワシのファミリーにならぬか？』

『ファミリー？』

『そう、ファミリーは英語で家族を意味する……今日からワシ等がお主の家族の代わりになってやろう。ロレンツォも良いな？』

『私は首領ドシの意思を尊重いたします。首領ドシがお決めになられたのなら私は何も申しません』

『うむ。そう言えばお主の名をまだ聞いておらぬな……お主、名はなんと云うのじゃ？』

『イツセー………僕は兵藤 一誠』

『イツセーか……良い名であるーさて、我がファミリーに加わるのであれば、ワシの事は首領ドシと呼ぶであるー』

『うん、ありがとう首領！』

こうして少年……兵藤 一誠は、首領・ヴァレンティノーが束ねる  
ヴァレンティノーファミリーの一員となったのであった……………

—————

一誠 s i d e

「ん……………んん〜！はあ、懐かしい夢を見たな……………」

俺は学園の屋上で昼寝をしてたら、ずいぶんと昔の夢を見た。

そう、俺と首領<sup>ド</sup>が出会った頃の夢だ。

首領<sup>ド</sup>にロレンツォ叔父さん、ガブ義姉に義妹のノア。もしあの時、  
ファミリーのみんなに出会えなかったら、今の俺は此処にはいないし  
……………いつかこの町でやる事もできなかつた。



字で倒れた天パの胸ぐらを掴んで無理やり起き上がらせる。

「おいコラ先公、一体何やってんだ昼休みの屋上で……」

「何って決まってるんじゃない……か○はめ波の練習だ。派手な必殺技を伝授しようと思つてよ」

「いや、それ人の必殺技だろうが！人類できねえ処か、アンタは絶対できねえよ!!一回死んで○王星に行くかゴラア!!」

「うっせええ!!か○はめ波はな、ジャンプ愛好家にとつてのロマンだ!!」

「んなもん知る訳ねえだろうが!!」

銀さんとできるできないの口論をしてると、扉から見覚えのある金髪の男子生徒がやって来た。

「やっぱり此処に居た」

「ん？おう、木場じゃねえか」

「あり、お前等知り合いな訳？」

「はい、イツセー君とは去年のクラスメイトなんです」

「まあ、そういうこつたな。んで、何か用か？」

去年のクラスメイトである木場に俺を訪ねてきた訳を聞くと……

少しだけ表情を暗くしながら口を開いた。

「実はうちの部長……リアス・グレモリー部長がイツセイ君に用があるみたいなんだけど……」

「グレモリー先輩が？」

「うん……ほら、イツセイ君はこの学園の有名人だからさ……是非、話がしたいって」

「ふうくん。放課後じゃダメか？」

「えっ!？」

「……っ!？」

俺の答えに木場はおろか銀さんも思わず目を丸くした。

「木場、何驚いてんだよ？お前ん所の部長が俺に話があるから、お前を寄越したんだろ？」

「そ、それはそうだけど……」

「だったら尚の事、会いに行こうじゃねえか？そのリアス・グレモリー先輩にな？」

『小僧、そういう風の吹き回しだ？』

(なあに、ちよいとばかしマフィアの一員として悪魔の親玉に挨拶ぐらいはしておかねえと行かねえだろ?)

『だが、相手は魔王の妹とこの金髪小僧を加えた眷属共だ……お前一人でやれると思わねえな?』

(その時その時で返り討ちにするだけさ……俺を誰だと思ってんだ? ヴァレンティノーノファミリー幹部の兵藤 一誠だぜ?)

『ククク……そうだったな?』

「つー訳で木場……放課後、2ーBの教室に来てくれ」

「……………うん、わかったよ」

木場は不安そうに頷くと、そのまま屋上を後にした。

(さて、どう動く? リアス・グレモリー……)

(イツセーのあの顔、なんか企んでんな……だが、グレモリーも裏でコソコソなんかしてんのは確かだ……一回キャロルに報告しておくか……………)



キャスト

坂田 銀時：杉田智和

兵藤 一誠：梶裕貴

謎の声：中尾隆聖

木場 祐斗：野島健児

首領・ヴァレンティノ：大川透  
ロレンツォ：小杉十郎太

## 第拾漆話 黒き龍の魔帝

一誠 side

授業が終わって放課後。俺は教室にやって来た木場と一緒に、使われていない旧校舎にあると言う《オカルト研究部》の部室へと向かっていった。

「あ……そういや木場。《オカルト研究部》って、お前を含めて部員は何人くらい居るんだ？」

「え？ああ、そうだね……僕と訳ありの子を含めて、6人だよ」

「訳あり……その訳ありって何年生だ？」

「1年生だよ。でもその子は人見知りが激しくてね……絶賛引きこもり中なんだ。でも、副部長の朱乃さんやその子と同じ1年生の小猫ちゃん……そして僕とかが定期的に様子を見に行ってるんだ」

「そうか。それにしても人見知りねえ……この学園には個性的と言うか、一癖ある奴等がわんさか居るからあんまり驚かねえんだよな」

「そうだね……あ、此処が僕等の部室だよ」

そんな会話の最中、ようやく部室に到着したは良いが………

「なあ、木場……少しばかり言わせてもらうけど良いか？」

「え？」

「お前ん所の部長って、どんな神経してんだよ………」

そう、部室の入り口に堂々と『オカルト研究部』と看板に書かれていた。俺は呆れながら木場にジト目の視線を向ける。

「気分を悪くさせてゴメンね……でも、これは部長の趣味なんだ」

「へえへえ、いい趣味をお持ちでヨゴザンしたね？」

趣味で良いのかと思いながら俺と木場は《オカルト研究部》に入室する。

中に入ると窓は全てカーテンで閉めきられ、火が灯った蝋燭が幾つも置かれ、部屋中には巨大な魔法陣が幾つも書かれていた。

「扉もあれだが、中も想像以上に凝ってるな……」

「うふふ……お世辞として受け取らせてもらおうよ、兵藤 一誠君？」

「お……噂をすれば何とやらか」

部屋の感想を呟く俺の前に、紅髪の女生徒……リアス・グレモリーが現れた。その後ろには黒髪のポニーテール美女と白髪の女子、そして……

「よお、まさかテメエがオカルト研究部の部員とは驚いたねえ……いやあ、運命つてのは怖いなあ……そうだろ？久沢 戒斗君？」

「兵藤 一誠……！テメエ木場あ!!何でそいつを此処に連れて来やがった!!?」

そう、毎回俺に喧嘩を吹っ掛けてる久沢だ。まさか、コイツが居たとはな……グレモリーも物好きだねえ？

「カイト、落ち着いて。私が彼を連れてくるよう祐斗にお願いしたの」  
「なっ!? そんなの納得できませんよ! コイツは神器すら無い何処にでも居る凡人ですよ! 部長だって、そういうのに興味なかったじゃ……」  
「……話が始まらないので黙ってください」……「ブガバツ!」

怒鳴り散らす久沢に対して、白髪の子は久沢の首元に強烈な回し蹴りを食らわせて黙らせる。

それにしてもあの体格でキレイな回し蹴りを繰り出すとは……一体、何処で身につけたんだ?

「うふふ……いつ見ても小猫ちゃんの格闘技はスゴイですわね?」

「……いえ、師匠に比べればまだまだです」

(自分の力に過信せずに謙遜か……ますます見所があるな)

できれば俺が立ち上げる新しいファミリーへ木場と一緒に招待したいが……それは別の機会にするか。

「それで、わざわざ俺の様な凡人を呼んだのはどういう見ですか……リアス・グレモリー先輩?」

「ふふ、そうね。それじゃあ改めて……私達、オカルト研究部が貴方を歓迎するわ!!」

グレモリー先輩……面倒だから序列56番は不適な笑みを浮かべ、高々に両手を掲げながら両腰から蝙蝠の様な翼を広げた。グレモリーに続いて木場や他の面々も同じ翼を展開させた。

「悪魔としてね……………」

(さあ、ビジネス会談の始まりだ……………)

精々、俺を丸め込める様な条件を提供しろよ？ 序列56番……………

木場 side

本当にこれで良かったのだろうか……………

正直、後悔はしている……………かつてのクラスメイトであり、僕の悩みを受け止めてくれた彼……………イツセー君を此方側の事情に巻き込ませてしまう事に……………

「……………祐斗先輩」

「ん？ ああ……………何、小猫ちゃん？」

「……………顔色が優れないのですが……………具合が悪いんですか？」

「いや、そうじゃないんだ……………そうじゃ……………」

「……………もしかして、あの人……………兵藤先輩の事ですか？」

「……………うん、正直イツセー君だけは此方の事情に巻き込ませたくないかったんだけど……………」

「……………どうですかね？まあ、あの人はそうでもないって顔してますよ？」

「え？」

小猫ちゃんが眩きながら彼を指差すと、イツセー君は真剣な表情で部長の言葉に耳を傾けた。

それはまるで、会社の社長が新人社員を採用するか否かの様な雰囲気を感じた。

社長側がイツセー君で、新人社員が部長という感じになっていた。

(イツセー君……………君は何をしようとしてるんだい？)

僕は胸に疼く一時の不安を感じながら、部長と話しているイツセー君を見つめた。

一誠 s i d e

「と言う訳で、この学園の……………いえ、この町で最も有名な貴方を私の眷属としてスカウトしたいの」

「なるほどね……………要するに先輩の元で働けと」

「まあ、そうなるわね」

はあ……聞いてて飽き飽きする自慢話だな？魔王の妹やら、次期当主やら、この町の管理者だとか………これほど不快になるのは初めてだ………！

この町は俺が生まれ育った町だ……お前の様な蝙蝠種族が支配者面をする事こそが腹立たしい………！

俺は淹れられたお茶をすすりながら不快感を落ち着かせ、口を開いた。

「……それで？」

「え？」

「先輩の元で働くとなれば……何かしらのメリットがあるはずですよ。それがなければ、この話は無かった事にしてもいいですよ。ああ、ご心配無く……今日見たことや聞いたことは誰にも話しませんので………」

「ふふ、急かさなくともちゃんと見返りはあるわよ？」

序列56番は笑みを浮かべながらそう言うと、ポケットから紅いチエスの駒を取り出した。

「これは、イーザイル・ピース悪魔の駒という物で私達悪魔には欠かせないモノなの。これを使って他種族を悪魔に転生させ、自分の眷属にすることが出来る代物よ。それに悪魔になれば永遠に近い命を手に入れる事が出来る、貴方は人を越えた力を手に出来るわ」

「永遠の命ねえ………確かに不老不死は人類の夢みたいなモンだから簡単に惹きつけられますが………」

「そうでしょう？下等な人間よりも私達悪魔が素晴らしいと思えるでしょ？墮天使や天使なんて目じゃないわ……それに」

序列56番はそう言うと、俺の手を掴んで自身の胸を触らせた……ハニトラのつもりか？

「……貴方の働き次第では、私の身体を好きに使っても良いのよ？」

「……………話は終わりか？序列56番」



「え……ガッ!？」

「部長!? ……テメエ、兵藤「お前には用は無い」……ブギツ!？」

俺はハニトラを仕掛けてきた序列56番の首を掴み、そのまま持ち上げる。殴りかかろうとする久沢が突っ込んでくるが……それは蹴りで対応する。

「……こ、これは……一体、何の………マネよ……!？」

「何のマネだ? この町の支配者面の蝙蝠風情がハニトラを仕掛けてきた報復だ」

そう答えると、俺は序列56番を壁目掛けて投げ飛ばした。

「ゴハアツ!？」

壁にめり込んだ序列56番は口から少量の血を吐きながら地面に倒れた。

「忌々しい蝙蝠ごときが……俺が育った町を支配した気になるなよ?」

「兵藤 一誠えええええつ!!!!」

『Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!』



『ハハハハハ!! スゲE!! これが噂二名高I ブリストデット・ギア・スケイルメイ赤龍帝の鎧KA  
!! 力GA、力がみなぎって来やがるぜえeエえエえeえe!!』

ハイテンションな気分でもものすごい魔力を放出する久沢は所構わず部室を壊し始めた。

『ちつ、下僕蝙蝠の分際で俺様の半身を好き勝手に使いやがってえ……!!』

「仕方ない、アイツの相手をすんのは気が引けるが………放って置いたら学園を崩壊させかないしな………よし、殺るか」

『HAハははハ!! 今の俺ハ最強DA!! まずは手始めにテメエかRA血祭りに上げTEやる……兵藤 一誠!!』

「力に呑み込まれたか。はあ、憐れな奴だ……」

『死ね! 死NE! 死ネ! 死ネエ!! 土えええe eええええエe eええええええええe e』

バカはむちやくちやなパンチを繰り返しながら突進を仕掛けてきた。

それと同時に俺は右腕を山吹の宝玉を甲に埋め込んだ巨大な黒い籠手に変化させて、勢いよくバカの顔をぶん殴った。

「オラツシヤアアア!!!」

『PGIヤGOパあっ!!』

その威力にもものすごい速さでバカは、部室の壁を突き抜けてグラウンドまで吹き飛んだ。

俺もその後を追う様にグラウンドに向かう。

『KUソがあああアアアアa a a a aアアアアああa a あ!!!何DE  
テめエがソイツを……『オイコラ!クソ蝙蝠!!』ツ!!?』

『テメエ、よくも俺の半身を好き勝手使ってくれたな…落とし前つける覚悟はデキてんだろおなあ、アア!』

『U、うるSEえ!!そウIうテメEこそ何モNダアa!!!』

『俺様が誰かだあ?クソ耳かつぽじいてよおく聞きやがれ!!俺様こそ、最凶最悪と恐れられた黒龍魔帝……ドレイク様だ!!!』  
シユヴァアルツ・ドラゴン

『KO、黒龍魔帝だTO!?そNナ奴ナンて原作にハ居なカツたZO!!!』

「原作?何を訳のわからん事を……まあ、お前を倒すしかこの騒動を終わらせる事はできないだろうからな……速攻で潰す!!」

俺はそう言うのと右腕の籠手……黒龍魔帝アフソードデッド・ギアの籠手を暴走バカに向けて構える。

「行くぜ……ドレイク!!」

『俺様に命令すんな小僧!!』

『無様に死N Eええ!! 兵藤一』

誠ええエエエエエエええエエエエえ  
eeeeeeeeeeee  
『!!!』

さあ、SHOW TIMEだ!!

キヤスト

兵藤 一誠：梶裕貴

リアス・グレモリー：日笠陽子

久沢 戒斗：小野大輔

姫島 朱乃：伊藤静

木場 祐斗：野島健児

塔城 小猫：竹達彩奈

黒龍魔帝：中尾隆聖